

# 卷末資料

## 亀ヶ岡遺跡関連資料再録

1. 佐藤 節(1887)「瓦偶人之図(第十九版)」『東京人類学会雑誌』3巻21号
2. 佐藤節筆 亀ヶ岡遺跡出土遮光器土偶原図
3. 淡屋(神田孝平)(1887)「瓶ヶ岡土偶図解(前号巻末ノ図ヲ見ヨ)」『東京人類学会雑誌』3巻22号
4. 若林勝邦(1889)「陸奥亀岡探求記」『東洋学芸雑誌』97号
5. 佐藤傳藏(1896)「陸奥亀ヶ岡石器時代遺跡地勢地質及ビ発見品」『東京地学協会報告』18巻2号
6. 市原壽文ほか(1980)「縄文後期・晩期の低湿地遺跡と環境復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究』文部省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」
7. 那須孝悌・山内 文(1980)「縄文後期・晩期低湿性遺跡における古植生の復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究』
8. 市原壽文ほか(1984)「縄文後・晩期における低湿性遺跡の特殊性に関する研究」『古文化財の自然科学的研究』

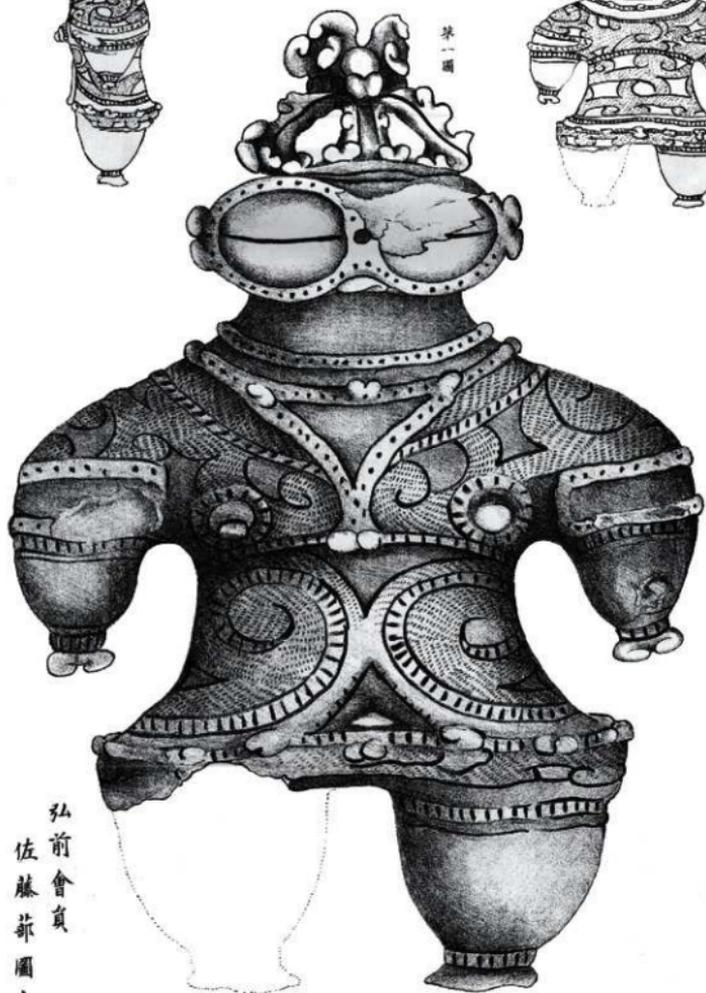
## 亀ヶ岡遺跡関連文献一覧





# 瓦偶人之圖

第九十版



弘前會真  
佐藤菲圖之

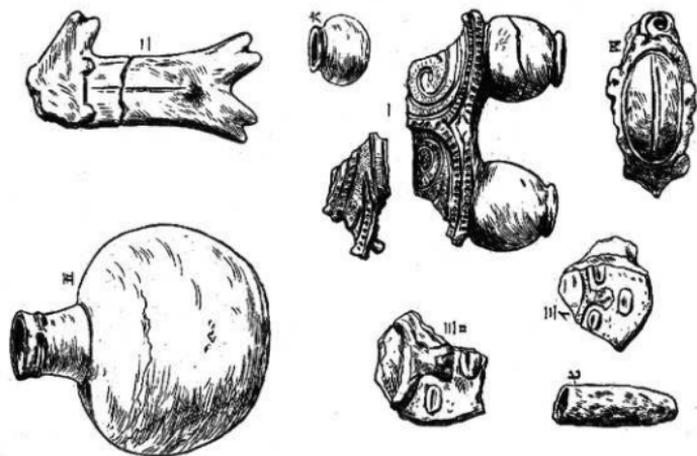
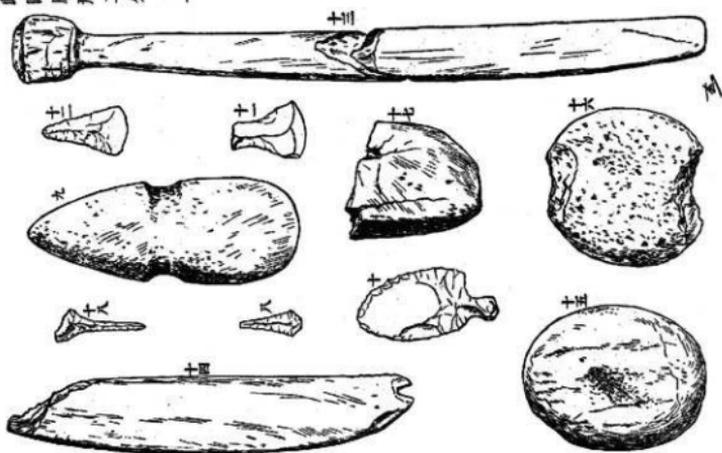


佐藤節筆 亀ヶ岡遺跡出土遮光器土偶原因  
 (弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究中心提供)





此圖原形二分之一





陸奥鐵ヶ岡石器時代遺跡地勢地質及ヒ

發見品 昭和十二年九月廿六日 於十月三日

發見石器石器等展覽

理學士 佐藤傳藏

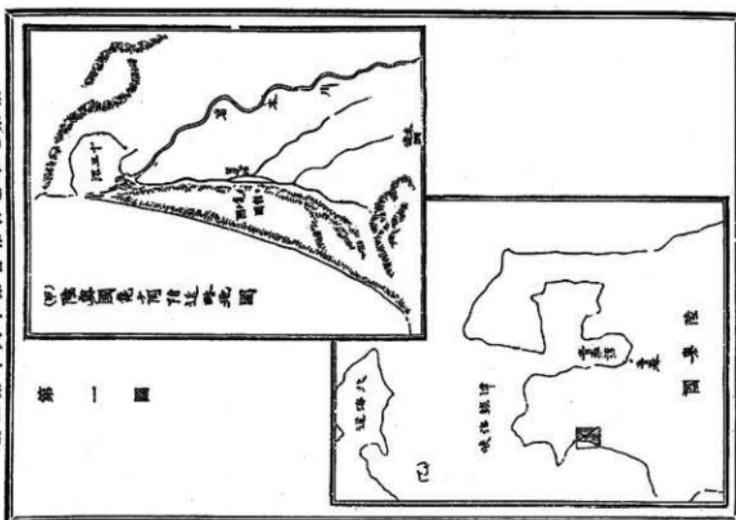
私ハ御會ヲ御話イダシマスノハ今日ガ初メデアリマスガ去年カラ今年ニ掛テ  
 マレテ前後二回陸奥ノ鐵ヶ岡ニ參リマレテ其處ヲ種々ノ發見物ヲ設マシメシレ  
 就キマシタ此處坪非ナシカラ發見ノコトカラ地勢ノコト地質ノコトヲ御會デア  
 御話シラフドウカト云フ御話ガゴザイマシラガ私モ鐵ヶ岡ノ御會スルノハ實  
 ニ名譽ナコトト思ヒマスカラ今晩此席ヲ汚シマシテ聊チアリマス  
 置テモ鳥羽地方ヲ旅行セラル、方ハ到ル所ノ好古家ハ固ヨリ其地方ノ有意案ト  
 モ云フ、人ハ昔石器時代ノ遺物アル所ノ土器ヲ珍藏スルノヲ見ルコトデア  
 ザイマスガ其所謂土器ト云フモノハ何處カラ出ルカト云フト十ノ八九近ハ陸奥  
 ノ鐵ヶ岡カラ出ルト云フ答ヲ得ルノデアリマス鐵ヶ岡ノ瓶………彼等ハ一級ノ  
 土器ノコトヲ瓶ト云ヒマスガ………鐵ヶ岡ノ瓶ト云ハ東軍ヲ向島ノ宮岡園子

目録ノ符録ト云フコトヨリ有名デアリマシラシメ鳥羽地方ハ三尺ノ童子モ知ラ  
 テ居ルト云フ有線デアリマス今晩御話イダシマスノハ此ノ如ク有名ナル鐵ヶ岡  
 ハドク云フ所ニ在ル其地勢ハドク云フモノデアルカ其地質ハドク云フモノデア  
 アル鐵ヶ岡ノ瓶ハドク云フ風ニシテ重クモノデアルカト云フトノ概略デア  
 リマス

地 勢

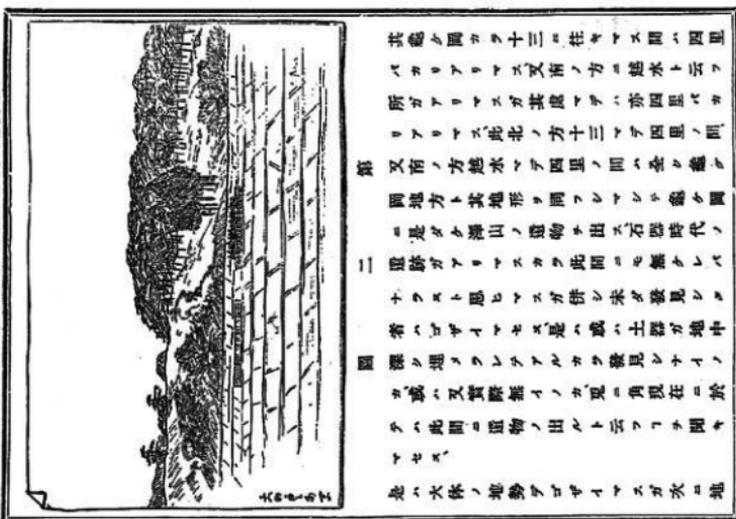
先ヅ鐵ヶ岡ハドク云フ所ニ在ルカト云ヒマス青森ノ西西北七八里ノ館岡村ト  
 云フ所ニアリマシラ東ハ田光沼ヲ隔テ、岩木河時ノ沖積層ニ臨ミ、西ハ洪積層ノ  
 臺地ヲ隔テ、日本海ニ接シテ居リマス青森カラ鐵ヶ岡ニ參リマスハ青森カラ  
 弘前ニ參リマス海軍ニ乘リマシテ三十分程モ時ガ立チマスト大津湖ト云フ停車  
 場ニ着キマスガ其處カラ下リテ五所河原ト云フ所近五里許ノ即馬車ニ乘リマス  
 五所河原カラ木登ト云フ所ヲ過キテ館岡村ニ至ルノ間三里余ノ所ハ人力ガアリ  
 マス鐵ヶ岡ハ館岡村ノ一ノ大字ニナリテ居ル所デアリマス丁度其西ノ方ハ日本  
 海ニ沿ラテ居リマスガ日本海マデハ瓶ノ出ル所ハ直徑二十町バカリゴザリマス  
 又鐵ヶ岡カラ北ノ十三ト云フ所ガアリマス是ハ彼ノ十三町ノ南ノ所デアリマス

東 京 學 會 報 告 第 八 十 二 號



第一圖

陸 奥 石 器 時 代 地 勢 圖



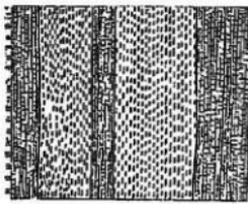
其處少間カラ十三里往キマス間ハ四里  
 バカリアリマス又南ノ方ニ越水ト云フ  
 所ガアリマスガ其處マデハ亦四里バカ  
 リアリマス此北ノ方十三マテ四里ノ間  
 第 又南ノ方越水マテ四里ノ間ハ全ク越水  
 間地方ト其地形ヲ同フレマシテ愈々圖  
 二 是タテ山ノ遺物ヲ出ス石器時代ノ  
 二 遺跡ガアリマスカ此間ニモ無クレバ  
 ナラズト思ヒマスガ併シ未ダ發見シテ  
 者ハゴザイマセ是ハ或ハ土器ガ地中  
 圖 深ク埋マラレテアルカラ發見シナイノ  
 カ或ハ又實際無イノカ見ニ角現在ニ於  
 テハ此間ニ遺物ノ出ルト云フヲ聞キ  
 マセヌ  
 是ハ大抵ノ地勢ヲゴザイマスガ次ニ地

東京地學協會報告第十八節 第二號

東シマノコトヲ申シマス

地質

第一私ガ始メテ幾々四ニ参リマシメノハ昨年即チ明治二十八年ノ十月アゴザイマシメガ二回共ニ丁度地面カヲ深ク八尺餘リ掘下クマシメ、從テ地層ノ截斷面ノ工合モ充分實際ニ見ルコトガ出来マシメ、併シ昨年掘リマシメ所ト今年掘リマシメ所ハ僅カ五六町外距リテ居リマセシメ、ガ地層ノ工合ハ随分異クテ居リマス。昨年掘リマシメ地層ノ工合ハ御管申シマスト、高イ丘ガゴザイマシメ、其下ニ田ガ



植ヘテアル所開闢代ガアリマシメ、ソレガ昔水ノ深ク二三寸アリマシメ、其掘リマシメ、昔代ノ面廣ハ長ク一丈二尺、子幅四尺、アリマス。其地層ノ有様ヲ申シテ見マスト。是ガ昨年掘リマシメ地層ノ工合ハ地面カヲ一尺バカリノ間ハ黒色ヲ帯ヒテ、泥土所謂黒色泥土層トモ名付ケテ、宜シイ層ガアリマス。

スガ其次ニ黄白色ノ泥炭層ガアリマス、此泥炭層ハマガ極新レイモノアゴザイマ

陸奥時鐘石層地勢及七層見品

シテ往々ニシテ種々ノ材木蘆葦杯ヲ認識スル事ガ出来マス。方言ニテルカト稱シマシメ、之ヲ乾シテ薪炭ノ代ハリニ用ヒマス。其厚ク二尺バカリアリマス。其次ニ僅カ八寸バカリ、灰色ヲ帯ヒテ、砂質ノ泥土層ガアリマス。此中ニ二三ノ土器及ヒ石器、破片ガアリマス。其次ニ紫色ヲ帯ヒマシメ、黒色ノ泥炭層ガアリマシメ、厚ク三尺許アリマス。遺物ハ黄白色泥炭層ノ下部カラ、此灰色ヲ帯ヒマシメ、砂質泥土層トモ稱下ノ、黒色泥炭層、此三ツノ層ニ掛ケテ出ルノアアリマス。重ニ出マス。ハ灰色砂質泥土層ト稱色泥炭層ノ上ノ部分アゴザイマシメ、其下ニ黒色泥土層ガゴザイマス。厚ク一尺乃至一尺五寸許、其次ニ灰色砂質泥土層ガゴザイマシメ、此處ニ至リマシメハ、全ク遺物ヲ見ナシ、横ニナラテ居リマス。丁度四尺バカリ、下カラ出ルノガ淺イノテ、五尺モアリマス。所カラ出ルノガ深イ所アアリマス。是ガ昨年掘リマシメ地質ノ工合アゴザイマス。東京近傍ノ遺跡ヲ考ヘテ見マスト、決シテ新云フ様モノアテ、ナク、地勢ノ工合モ、越クテ居リマス。レ地層ノ工合モ、亦余程越クテ居リマス。同様子ハ泥炭層カラ遺物ノ出ルコトハ、随分アリマス。ガ、日本子出ルノハ今度ガ新アゴザイマス。能ク人ノ間カ、コトアゴザイマス。ガ、此遺物ガ、今ヨリ何年許以前ノ者ナリヤトハ、疑ヒガ起ルコトアゴザイマス。ソレテ、四尺モ五尺モ深

東京地學協會報告第十八年第二號

イ所埋ワテ居リマスカラ隨分古イト云フコト又少ハ云ヘマスガ何千年トカ何  
 萬年トカ云フ積ニ數キ以テ音ヒ表ハスコトハ中々六テ數コサイマス併レ此遺物  
 ノ存在ト地層ノ工合ニ依テ石器時代ノ人民ガ住テ居ワドト云フコト又其ノ以  
 後地形ガ多少云フ風ニ變遷シテカト云フコトハ考ヘルコトガ出來ル御承知ノ通  
 リ泥炭層ハ昔レ沼ガアリテ其處ニ科々雜多ノ草ガ生ヘテ居ルシレガ地形ノ變動  
 ニテ水ガ無クナリテ地中ニ埋レハ今日ノ所謂泥炭層ニナルノデアリマスカラ泥  
 炭層ノアリマスノハ昔レ其ノ處ガ沼デアラクテ證據デアリマス英吉利ノ地質學者  
 泥土層ノアルノハ其處ニ水ガ多少流レテ證據デアリマス英吉利ノ地質學者  
 ハイト云フ人ハ泥炭層ガ毎年出來ルニ從テ一ノ薄キ層ガ生ズル故ニ泥炭層ガ何  
 年掛ラテ出來ルカト云フハ其中ニアリマス所ノ薄イ層ノ數ニ依テ知ルコトガ  
 出來ル例ヘバ此泥炭層ハ何年間ニ出來ルカト云フコトハ知ルハ此泥炭層ニ薄  
 イ層ガアル丁度木ノ木理ニヨリモノノテ一年ニ一ラノ層ガ出來テ次ノ年ニ次  
 ノ層ガ出來ルト云フ風ニ其泥炭層ガ出來ル年月ハ歸リ其中ニ合ナル薄イ層ノ  
 數ニ依テ知ルト云フ說ヲ立ツコトガアリマス併ナガラ泥炭層ノ成長ノ速度ハ  
 其泥炭ノ種類ニ依テ消長スルノイナラズ固ク泥炭層ガ其部分ニ從テ分テ造ヒマ

品見發ヒ及質地勢地跡遺代時器石岡ノ龜與鹽

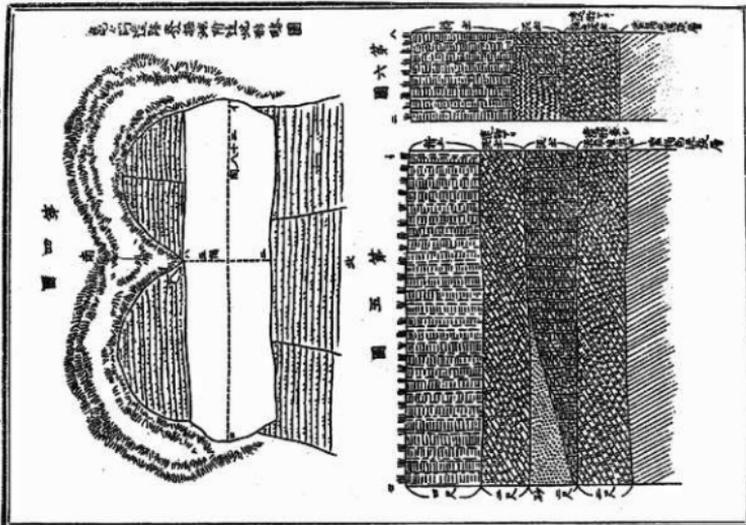
スカ此キナハ氏ノ說ニ依テ泥炭層ノ年代ヲ知ルト云フコトハ少シク積密ナ  
 ラザル憾ガアルト思ヒマス依ニ此計算法ニ依テ今度ノ龜ノ圖ノ泥炭層ノ年代ヲ  
 知ルコトハ出來ナイダボト思ヒマス先刻モチヨラト申シテ通リ日本ヲハ  
 泥炭層カラ石器時代ノ遺物ガ出ルコトハ未ダ見聞レラコトハアリマス今度龜  
 ノ圖ノ泥炭層カラ出ルガ物ヲデアリマスガ西洋諸國ニ於キマレテハ丁抜ヤ要  
 圖ナトハ最有名モノデアリマス就中丁捺ニ於キマレテハ泥炭層ノ研究ガ余程  
 行キ居キマレテ其泥炭層ノ種々ノ名ヲ與ヘテ其順次ニ堆積スル有機ヲ採テ研究シ  
 タ人ガアリマス併ナガラ我邦ニ於キマレテ未ダシレダクノ研究ガ固キマレ  
 ノハ實ニ残念ノ次第デアリマスシレテ又總体泥炭層キ分テ二ラト設シマレ  
 テ第一ハ現今尙ホ出來ラアル所ノモノ第二ハ既ニ出來テ仕舞ワモノト二ラ  
 ニ分テマスガ龜ノ圖ハ第一ノ現今出來ラアルモノデアリマス其形成ノ  
 作用ヲ中止シテ居ルモノデアリマス中止シテ居リマスガ大体分テマスト之ヲ二  
 ツニ分テコトガ出來ル即チ新シイ方ノモノハ質白色ヲ帶ヒテ居ル此泥炭層ハ極  
 新シイデアリマス古イ方ハ少シク褐色ヲ帶ヒテ紫色デアリ是ハ古イ泥炭層デア  
 リマス以上第一回即チ昨年ノ十月ニ據リマレテ地質ノ大要デアリマス

東京地學協會報告年第十八號

第二回同々本年ノ五月發掘イテレシテ結果ハ昨年ト少シク其趣ヲ異ニシテ居  
 リマス丁度細リマシク場所ハ昨年ノ場所ト距離コト北ノ方ニ二町ベカリテ地質  
 學上ガラ云ハバ同シク沖積層ニ屬スル低地デアリマス今其地形及ヒ發掘ノ模様  
 ノ大休テ申シマスレバ茲ニ東京近傍ヲ申シマスレバ飛鳥山トイヨナ山ガアリ  
 マス武下ニ苗代ガアル此處ニモ苗代ガアル此苗代ニ接シテ長チ二十八間計ニ幅  
 五間計ノ畑ガアル今年掘リマシクノハ此畑全体デアリマス情トモ特別ニ此畑ト  
 掘ヒマシクカト云フト此處ニモ苗代ガアル此處ニモ苗代ガアル此處ニモ此處ニモ掘  
 リマシクテ淨山出ダト云フコトデアリマス此處ヲ掘ラテモ此處ヲ掘ラテモ淨山  
 出ダスカ其間ニ埃ヲテ居ル此畑ヲ掘ラテモ各分出ルデアラウト云フ僅業人ノ  
 見込ヲ立テテ發掘ニ着手シクノデアリマス然ルニ此長チハ二十八間幅ハ五間モ  
 アリマスガ此畑ノ中テ又地質ノ工合ガ餘程熟クテ居リマスコレテ此處カラ掘始  
 マテ段々ト此方ニ掘ラテテ參リマシクガ此地質ノ工合ハ此處圖ヲ指スニ表ハシテ  
 置キマシク  
 此處ヲ掘リマシク結果ハ初ニ厚サ四尺バカリノシル即チ耕土ガゴザイマス是  
 ハ現今畑ヲ耕ス爲ニ肥料ナドヲ他ヨリ持テ運ビマスカラ四尺ノ耕土ノ中カラハ

- 183 -

品見登ヒ及質地勢地跡遺代時器石關ノ能與繪



- 184 -

東地學協會報告第十八年第二號

種々多し現今ノ物ガ田マシテ石器時代ノ遺物ニ關係ノナイモノデアリマス其  
 次ニ厚サ二尺バカリ粘土ノ層ガアル此中ニハ木炭モアリ、灰モアリ又鏡タカム土  
 ノ如キ者モアリテ實ニ石器時代ノ地面デアラシク見ヘマス此中カラシテ多  
 クノ遺物ガ田マス其下ニ厚サ二尺バカリノ灰色ノ砂ノ層ガアリマス此砂ノ層ハ  
 面ノ方ニ至ルニ從ヒ漸々ニ薄クナリマシテ遂ニ全ク隠滅シマスコレノ中  
 カラハ一片ノ遺物ヲモ出シマセム此砂層ノ下ニ紫色ノ帯ヒタル泥炭質粘土層ガ  
 アリマシテ其厚サ一尺乃至一尺五寸アリマス此中ヨリ多クノ遺物ヲ出シマス  
 マリ遺物ハ此砂層ノ上カラト下カラト兩方カラ出マスチレハ其上ノ方ヨリ出テ  
 マス遺物ハ新シクテ厚サ二尺モアル砂ノ層ヲ隔ラテ居ル下ニアリマスノハ古イ  
 様ト考ガ致シマス水ノ作用ヲ砂ノ層ガ厚サ二尺モ出来マスニハ人間ノ壽命杯ニ  
 比ベテ見ルト餘程長イ年代ヲ經ラテ居ナクレバナラス從テ上カラ出ル遺物ハ割  
 合ニ新シクテ下カラ出ル遺物ハ割合ニ古イト云ハナクレバナラス、コレドモ實際  
 細ク見マシテ結果ハ上カラ出ルモノモ下カラ出ルモノモ決シテ新舊ノ區別ヲ見出  
 スヲ出来ナイ古シト思ハルモノガ下カラモ上カラト同様ニ立派ノ裝飾ヲ施  
 シ土器立派ニ層上トマシテ石斧ナドガ出ルコトガアリマス而シテ其砂ノ層ハ段

-185-

陸奥地勢地層時代石器土器及七品見

々ト東ノ方ニ行クニ從ヒ得ナリマシテ遂ニ畑ノ其ノ中カラ全ク砂ノ層ハ無  
 ナラナ仕舞ラセ此方ニ行キマスト次ニ泥ガアリマシテ其泥ノ中カラ遺物ガ出ル  
 様ニナラテ居リマス此工合ニ餘程奇妙デアリマシテ通例地層ノ出来ル有様ヲ以  
 テ説明スルニ從ヒマセム是ガ今年掘リマシテ地質ノ大体ノ細部ヲゴザイマス、  
 シレカラシテ又此地質ハ山ノ方ニ沿ヒマシテ所ト畑ノ方ニ沿ヒマシテ所トハ工  
 合ガ違フテ居リマス此ノ縦斷面ノイロト云フノハ山ノ方ニ沿フテ所トハト云  
 フノハ畑ノ方ニ沿フテ所デアリマシテ相繼ラス耕土ガアル其次ニ山ノ方ニ沿ヒ  
 マシテ所ハ粘土ノ層ガアリ畑ノ方ニ沿ヒマシテ所ハ泥炭ノ層ガ出テ来マシテ其  
 泥炭ノ層ノ厚サ所ニ二尺モゴザイマス相繼ラス遺物ハ第一ノ層カラ出ル其下ニ  
 種々ノ色味ヲ帯ビタル粘土ノ層ガアリマス此粘土ノ中ニハ炭モアレバ灰モアリマ  
 シテ實ニ石器時代當時ノ地盤ノ土ラシク思ハレル觀ニガアル其下ニ紫色ノ帯ヒ  
 タる色ノ泥炭層ガアル遺物ハ此層カラモ出ル此層ハ山ノ方ニ近接シテ所ニ至レ  
 ハ無クナリテ畑ノ方ニ行クト漸々ト出テ来ル抑モ泥炭層ノアルノハ昔其處方沼  
 澤ガアルコト證據デアリマスカラ山ノ方近キ所ニ泥炭層ガ無クテ畑ノ方ニアルト  
 云フノハ絶分當然ノコトダラサト思ヒマス、

-186-

東京地質學會報告第十八年第二號

是ヲ以テ龜ヶ岡ノ大體ノ地質ノコトハ述ベ終リマシカガ、次ニ最も要用ナル問題ハ龜ヶ岡ノ遺物ノ出所ハ果シテ住居跡デアルカ或ハ又住居跡アチクシクアレ等ノ物ガ或一種ノ原因テ他ノ處ヨリ此處ニ持運バレド、デアアルカト云フコトデアリマシキヲ云フ山ノ下ノ田圃ノ中ニ石器時代ノ人民ガ住シテ居ラテ遺物ヲ其處ニ遺シテカ或ハ住居ハ別ニ高イ所カ何處カニアラフテ其處カラ一種ノ原因デアテホテアレモノデアアルカト云フコトハ龜ヶ岡ノ遺跡ヲ研究スルニ付キマシテ要用ノ問題デアルト思ヒマス第一龜ヶ岡ノ遺物ノ出マシ所ヲ私共ノ目ニ慣レマシキハ東京近傍ノ遺跡則チ王子ノ西ノ原貝塚及ヒ大森貝塚杯ト被ベテ見マス、全ク其地勢地質遺物ノ出方ガ違フテ居リマス、御米知ノ邊ニ東京近傍ノ石器時代ノ遺跡則チ西ノ原大塚杯ハ其存在地ノ地質ハ洪積層ヲ經テ層即チ赤土ノ上ニゴザイマス沖積層ニアルハ極メテ稀ヲ被ノ道灌山ノ下ニアリマス中里村貝塚ハ沖積層デアリマシガ中里村ヲ發見シテ時ハ低イ所ノ沖積層上ニアルト言フテ大體チシカ位デアリマス龜ヶ岡ハ前ニ申シマシキ邊リ存在地ノ地形チ云ヘバ太古ハ落デアラフワケト感ハレル様ニ低イ低地ノ中ニゴザイマシテ太古ハ陸テアラフワケト思ハルハ高臺ノ上ニハアリマシキ其地質カラ申シマスト古キ洪積層ノ上テ

品見發ヒ及質地跡遺石器岡龜

ナクテ地質ノ系統上最も新シイ沖積層ノ中ニ埋ラテ居リマス、或岩石……地質學上如何ナルモノデアモ地面ノ一部ヲ形成シテ居リマシキモノハ岩石ト云ヒマス……岩石ハ粘土ニアラシク泥炭層若シハ泥土デアリマス、此ノ如ク龜ヶ岡ノ地勢地質及遺物チ出ス有様ニ就テハ通例ノ石器時代ノ遺跡ト違フテ居リマシテ之ヲ説明スルハ總體ニ據ルコトガ出来マス即チ第一ハ其場所ハ元來石器時代人民ノ住居地デアラト云フコト第二ハ住居地デアテ他ノ所カラ一種ノ原因……或ハ水ノ力ヲ他ノ原因テ以テ其處ニ持運バレドト云フコトデアリマス西洋ニ埋テ了等ノ泥炭層カラ遺物チ出スハ昔ノ水上住居ノ跡デアラフデアリマシキ貝塚ヨリ遺物チ出スハ其附近ニ古代人民ノ所ガアラフコト云フコトデアリマシキ西洋ノ洪積層ノ砂利ノ中カラ出マスハ其處ガ住居跡アチクシク他ノ住所ガアラフ水ノ力ヲ砂利ト同様ニ持運バレド、デアリマス今龜ヶ岡ニ就キマシテ考ヘマスト第一ノ場合ノ如ク住居跡デアアルカ或ハ第二ノ場合ノ如ク水ノ力ヲ運搬サレド、デアアルカ之ハ容易ニ斷言スルコトノ出来ナクテ充分研究ノ價値アル問題デアルト思ヒマス、龜ヶ岡附近ノ人ハ大體申シマスルニ龜ヶ岡ハ昔シク大地震ガアラフ其地質ノ爲ニ

東 京 地 學 協 會 報 告 第 二 十 八 年

遺物ガ上部ノ高イ所ヨリ低イ所ニ落込シテアルレバカラ深ク遺物ガ埋ラ  
 シ居ルト申シマス或ル説モ面白イ説デアラフタ元來人類ガ沼ノ上ニ住ラテ居  
 ラシノアチ此低イ所ニ遺物ノアルノハ地震ノ爲ニ高イ所カラ其處ニ落込シテ  
 ノアモアルカモ知レナイケレドモ地震ノ爲ニ高イ所カラ落込シテスレバ固分  
 不都合ナキ事實ガ現レマス其遺物ヲ合シテ居ル地層ヲ觀シテ圖ベテ見マスト丁度  
 當時ノ竈跡ト思ハレル様ナ次モアリマス又木炭モゴザイマス其他武土ハ自然ノ  
 土デアラシ人ニ踏マレタリ人ニ取扱ハレル様ナ觀ニキ見シテ居リマス又一般ノ黒  
 土赤土トカ云フ一定ノ色ヲ有セズ顯々多ク色所謂雜色ヲ見シテ居リマレタ石  
 器時代當時ノ地盤チアコソ雜々觀ニガアリマス又遺物ハ完全ナル土器立派ナル  
 玉ナラシ云フモノバカラアチ打鉄ヲ思ハレル様ナ土器ノ破片或ハ食糟トモ  
 云フベキ動物ノ骨ガアリ又貝殻ガアリマス此ノ如ク厚サ三四尺モアル當時ノ地  
 盤ガ丁度皮チ割イダ様ニ遺物ト一緒ニ低イ所ニ自然落込シテ云フノハ如何ニ  
 モ珍奇ナ頭案チドクモチク云フ頭案ガアラフトハ考ヘラレス一步進ラフ此ノ如  
 ノ珍シイ地震ガアリマシヤトスレバ其上ニ住居シマシヤ人類ハドクナリマシヤ  
 カ若シク云フ珍シイ非常ナ天災地變ガアリマシヤナラバ其身ヲ免ルルコトハ

- 189 -

陸 奥 石 器 時 代 地 勢 及 地 質 見 察

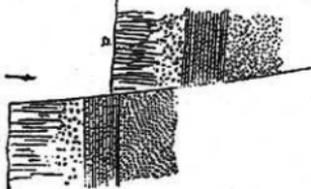
河原出来マスマイカラ此遺物ト共ニ地中ニ埋ラシテレバナラス僅ニ處  
 間ハ私ノ掘リマシヤノハ二回アコザイマシヤ其前ニ所ノ者ガ此處ヲ掘ラフコ  
 トハ何回モアルケレドモ未ダ完全ナ人骨ヲ掘出シタモノハゴザイマス今度モ  
 人骨ヲ見モハ一ツモアリマスアチ若シク云フ地震ノ爲ニ高イ所カラ  
 落込シタモノナラバ人骨モ幾分チ出テ置イト思ヒマス然ルニ實際一側ノ人骨  
 モ出テアルニ由チ見レバ地震説チ以テ此低イ所ニアルコトヲ説明スルノハ少レ  
 シ程カナラスコトチハチカト思ヒマス若シ又此所ノ低イ沼澤ノ様ナ所ガ石  
 器時代當時ノ高臺ト固權ナ高クアラフモノガ一朝大地ニリノ地震ノ爲ニ陥没シ  
 タトスルナラバ其低イ所ノ地層ハ高イ所ノ地層ト一致スル所ガナラハナラ  
 例ニペ圖ヲ指シテ

是(1)カケル高イ所ト是(2)カケル低イ所トアラフ元ト高イ所ニアラフガ一期地  
 震ノ爲ニ陥没シテ低イ所ニアルト説明シヤウト致シマスレバ此(2)ノ處ヲ掘ラフ  
 見レバ(1)ノ所ト固シ雜々地層ガ現ハレテ來ナラレバナラズケレドモ實際發掘ノ  
 結果ニ依テ見マス此處ノ地層ト此處ノ地層ハ一致シテ居ナイ高イ所ハ最上部  
 ニ赤土ノ層ガアリ次ニ砂ノ層ガアリマスガ低イ所ハ泥炭層トカ泥土トカアリ

- 190 -

東京地學協會報告第十八年第二號

アシテ各地質ノ性質ガ違フ所ニ居リマシムルアレバ是ト是トハ固ク高  
クアアワク地質ノ爲ニ陥没シタト云フ説モ行ハレスト思ヒマシムル然レバ此場所ハ  
通常ノ住居場所アアワクカ陸リ相ミシイヨナ所ニ人ガ住リテ居ラカト申シマ  
スレバドウモ泥炭層ノ出来カ様ナリ  
地ニ家庭ヲ造ラシ住ミテ行カト  
イト思ヒマシムル然レバ其處ハ理ノ古  
七 或ハ南洋人ニモイキマヤノ今日ノ如  
ク水上住居ヲ爲シテ居ラカト將キ  
圖 が見マスト此處ハ水上住居ノ證據  
トスル根拠ガ無ク一面ニツラリヒノ湖  
アハ概ク發見シテ其根アルヲ以テ始メテ水上住居ノ遺跡アルコトヲ確メマシ  
ムガ爲メ今固ク固ク從來モ水上住居ノ證據アル根拠ガ發見シテハアリ  
マセシムルアレバカク蓋シテ固ク水上住居ノ跡アリト云フコトガ分リマシム  
ル又蓋シテ泥炭層中ノ遺物ハ通常ノ動物ノ遺骸ガ水成岩中ニ埋没サレタモノ  
ノ如ク水ノ作用ニ依テ運カラル運搬サレタモノデアアルカト考ヘテ見マスト遺物



第七圖

島根縣及那賀郡地質調査報告

ヲ包含スル岩石ノ種類ガ全クチウアイト云フコトヲ證明イタシマシム故ナ  
ク水ノ作用ニ依テマシムル岩石デアリマスト砂カ或ハ少シトモ粘土ニシテ  
ノアナクレバナラカク少レドモ前ニ申シマシムル炭トカ炭トカ種々多ク變ラシ地  
層ガゴザイマシテ實際決シテ水ノ流レテ段々階梯ヲ爲シテ居テ、コレ故ニ此處  
跡ハ又水ノ作用ア速方カラ持テ漆トモ申シテマセシムル通常ノ住居跡ア  
シ又水上住居ノ遺跡アゴザイマセシムル又地震ノ爲ニ陥没シタモノア又水ノ  
作用ア速方カラ運搬サレタモノデアリトスレバ蓋シテ固ク遺跡ハドウシテ出来  
カト云フコトニナリマシム

御告知ノ如ク今年六月十九日午後八時三十分頃那賀郡中津島ノ三ヶ國ノ東海岸  
ニ非常ク大海嘯ガゴザイマシテ豪麗ノ流失ヤラ人民ノ死亡ハ夥シク實ニ輒共ノ  
被害ニ堪ヘス所デアリマシムル此海嘯ト云フモノハ我邦ニ於ケマシテ通常地震  
ノ如ク岸アルモノデアハゴザイマセシムルガ決シテ種々モノデアリマセシムル最近  
ノ間ニ依リマスト天武天皇ノ十二年ニ海嘯ガアリマシタシムレカク寶永四年享  
保十一年天保六年安政元年シレカク明治十七年固二十五年モアリマシムル海嘯  
ニ海嘯ガ度々アラフ所デアリマシムルガ現今ニ於テ此ノ如ク那賀郡海嘯ガアリマシ

東京地質學報告會第十號年二第

レバ石礫時代ノ當時ニモ海陸ガアラフコト云フコトハ隨分想像ノ出來ルコトアゴザイマス私ハ此海陸ヲ以テ龜步岡ノ泥炭層カラ遺物ノ出ルコトヲ説明シヤウト思フノデアリマス龜步岡ノ遺物ヲ念フテ居ル層ハ泥炭層デアリマスカラ石礫時代ノ當時沼澤ノ地デアラフコト云フコトハ分リマスガ一種ノ地震ガ恐ラ西ノ方ノ日本海中ニ起リマシテ其海陸ガ十三湖ノ河口ヲ過シテ此沼地ニ進入ラフテ來テ龜步岡ノ窪地ニ過シテ此窪地ニ石礫ヲ遊リ土器ヲ遊リ五テ造ラフテ居ラフテ人民ノ家屋ヲ毀壞シテ其勢ヒガ非常ニ急劇デアラフカガ當時ノ人民ハ到底之ヲ避ケル暇ナラ石礫トカ土器トカ總テノ物ヲ當時ノ地殼ト共ニ洗去ラフテ低イ所ニ持來シモノデアラフヲ我共ハチラフ云フ風チ考ヘ付テモノデアリマスチレバ此ノ知ク寶玉家具チ下ハ此低地ニ埋没シ人間モ固ヨリ其難チ免ルコトハ出來チカラフモノモ人間ハ石礫チ下ニ較ベルト比重ハ輕イレ又多少餘餘樹ノ心得モアリケルベシレバ浪ノ爲ニ運搬セラレ隨分遠方マテ持ラテ往カレ此龜步岡ハ其跡チ止メナイ様ニナラフノデアリナイカト思フノデアリマス龜步岡ハ今回ノ發掘バカリテモ土器ノ完全ナルモノモ或ハ完全ニ近イモノガ二百五十モゴザイマシテ從來發掘シモノハ三千近イノアゴザイマスガア貝塚ノ遺物ヲ加ヘテ性質チ書ヒヤリ電燈

-193-

品見發セ及實地勢地跡遺代時器石岡龜與誌

トシテハたノ及チ深直完全ト土器ヲ限リ候ニテ買玉チモ是ニコトチ實原エキハ困難デアゴザイマスガ海陸説ニ依テ説明イタシマスレバ立派ニ完全物ガ出來ルノチ説明スルコトガ出來マス、  
 シレカラシテ海陸説ノ一ノ助チトナルベキモノハ土器ノ破片或ハ完全ナルモノ一種ノ水草ガ運入ラフ居ルノデアゴザイマス、  
 (是ヨリ一々實物チ示シ)  
 此運リ土器ノ層トカ破片トカ高坏ノ臺チ下ニ水草ガ湖チ卷イテ運入ラフ居リマスハ本ガ充分植物ノ性質ガ研究ガ付キマセマスガ要スルニ水草ト云フコトハ粘土擬フベカラザル事實ガラフト思ヒマス植物ノ専門家モ勿論之ヲ許シマスガ水ニ運入ラフテ居レバ立派チ形チシテ居ル然ルモコソチ風ニ空氣ニ懸シマスト結ト膠ラカ様ニチリマスガ水ニ浸シテ置テバ其儘何時マモ立派ニシテ居ルシレカラ考ヘキモ此水草ニ斷ル所爾水草ノ性質チ帶ヒテ居ルヲ分ルガ故ニ劇シイ海陸ガアラフチ水ヲ以テ上カラ下ノ方ニ持來シモノトスル方ガ餘程都合ガ宜イガラフト考ヘルノデアリマス  
 序ニ參考ノ爲ニ龜步岡ニ最近イ發掘ノコトチ一言イタシマスガ龜步岡ニ存在

-194-

東京地學協會報告第十八號 第二號

スル盆地ノ沿岸ハ實ニ有望ノ所デアリマスガ割合ニ道路ノ發見ハ少ナクコヤ  
 マス私ノ實踐イコシマシタノハ田小野ノ遺跡デアリマシタ今更ニ掘ル所ヨリ  
 五六町北ノ方ニアリマスガ此遺跡ハ全ク龜ノ岡ト性質ガ違ヒマス存在地ノ地層  
 ノ點カヲ申シマスト沖登層ヲナク浪發層デアリマス又其地形ハ低イ所デアリタ  
 地デアリマス此遺跡ハ龜ノ岡ト此ノ如ク性質ヲ異ニスルノミナラス從來知レテ  
 居ル總テノ遺跡ト其趣ヲ異ニシタ居リマス其田小野ノ遺跡ノ圖ハ



是ガ地面ヲ地面ノ下二尺三寸程掘イ土ガアリマシ  
 其下ニ赤イ土ガアリマス其下ハ掘ワラ見ヤセヌカラ  
 第一 分リヤセヌガ要スルニ上ガ黒土下ガ赤土デアリマ  
 第二 スルワレテ赤土ノ存スル所ニ掘ワラ云フ破片ガ拱ツテ  
 居ル此ノ如ク赤土ノ層ノ中カラ遺物ガ出ルハ未ダ  
 圖 會入見ルコトハナク東京近傍ノ隨分期ウ云フ處カラ  
 遺物ノ出ルコトガアリマスガ昔黒土ノ下部即チ赤土  
 ニ接スル所ヨリ出マス陸奥邊リアモ他ノ所ニ掘ラ  
 見ヤスト多ク黒土ト赤土ト接スル所カラ出ル然ルニ田小野ノ遺跡ハ黒イ所ニハ

一ツモ無クシテ赤土カラ許リ出マス此赤イ土ハ地質學上カラ時代ヲ云ヒマスト  
 洪積期ノ地層デアリマス即チ洪發層ノ上部ト我々ガ見テ居ル所カラ遺物ガ出ル  
 此ノ如ク洪積層カラ遺物ノ出ルハ洪積期人類ガ居ララト云フ等ヲベカラサ  
 證據トシテ差支ナキ様ニ思ハレマス併シ此一ツア日本ニ洪積層ノ人類ガ居ラ  
 ト云フ大膽ヲ斷定ハ出來ヤセヌガ是ハ餘程他ノ遺跡ト違フヲ深ク注意ヲ要スル  
 遺跡ト思ヒマス龜ノ岡ヲ三町乃至五町距ラル所ニ掘ワラ云フ遺跡ト見ル  
 ハ餘程注意ヲ要スル點デアルト思ヒマス

是ヲ地質ト遺物ノ出方ハ大概異ニマシガ次ニ發見物デアリマス  
 發見物  
 龜ノ岡ヲ發見シマシタモノハ其種類ニ於テモ其數ニ於テモ澤山コヤイマス今更  
 一回ノ發見バカリア土器ノ完全ナルモノ及ビ完全ニ近イモノハ併セテ二百五十  
 種アリマシタ其中土偶ガ十九個動物ノ形ヲ模シタ土器ガ二個デアリマス又此外  
 石棒二十五本磨製石斧十本打製石斧十九本石鏃二十本其他五類デアリマス其  
 大要ハ表ヲ以テ示シテ置キマシタ

品見録及發見地層遺物石器圖ノ龜ノ岡



東京地學協會年報第十八號

入ラテ居リマスガ、自然ニ形ニ成レテ居ルカ或ハ石器時代ノ人民ガ意欲ガアラテ新ク云フ風ニシテカトクモ分リマセシ、是ハ完全チモノニ運入ラテ居ルベカリテナク大概ノ薄片ノ少シク大キクテ中ノ回ラガモノニハ大概滿チ得イテ運入ラテ居リマス又此ノ如ク高坏ノ底ノ方ニモ運入ラテ居リマス何カ意味ガアラテ石器時代ノ人民ガ入レタモノカ或ハ自然潤滑チレタカ兎ノ角何トモ断定スルコトハ出来マセシ、

次ニ胡桃ノ實ニ至時代ノ遺跡カラ胡桃ノ實ガ出ルト云フハ少シク奇ニ思ヒマスガ實際石器時代ノ遺跡ニヨリ胡桃ノ實チ出シタルヲ決シテ種ヲハゴザイマセシ此出マレシハ武藏ノ下沼部貝塚餘城ノ新地村貝塚與ノアイノ海遺跡チレカテ道灌山ノ下ノ中里村貝塚カラ出テ居リマスチレカテ石器時代ノ遺跡カラ胡桃ノ實ノ出ルノハ稀チ埠實チハアリマセシ、

チレカテ器物ノ中テハ石器ガ第一チゴザイマス石器ノ實用品チナイモノハ實用品ニ割リテ銀ニ裝飾品ト成レマシ、

九五ニ立派チモノガアリマシ、洞チ云フ風ニ人工チ加ヘテチナイ通常ノモノモアリ、多少鍍銀イテ跡ノアルモノモアリ、少レベカリ擦磨イテ上ニ穴チ明チ掛チ

龜與石器時代地勢及位置之見品

ノモアル、チレカテ立派ニ穴チ明チカノモノアラ、自然ニ其鍍銀ノ順序ガ分ラテ居ル此若石ハ菅森ト秋田ノ境ニ大戸瀬君ト云フ名所ガアリマシテ岩ガ深山チ出シテ居リマス此大戸瀬岩ハ此若石カラ出来テ居リマス從テ跡チ澤ノ海邊ニ此石ガ多ク、磯石トナリテ蓄チテ居リマス、此近邊カラ持テ来ルノダラヒト思ヒマス、

昔僕ト云フハ新シイ名チゴザイマスガ已チ得ヌコトナ名チ付クマレシ、歐イ昔石ノ一種ニ彫刻チ施シモノチアリマス、則チ之ノ實物チ示シテチノゴザイマスガ是ハ今チ東京近傍チ出ルコトハ少ナク漸チ下沼部カラチ出マレシ、

斯ク云フカ龜ノ岡田チ氏度四チ出ルノハ珍シイコトチアリマス、

私ノ所謂石器トハ平イモノチ申シマシ、其一種ニ玉ニ模チモノガ附イテ居リマス、此玉ノ彫刻ハ複雜チモノガアリマス、石棒トハ丸イモノチ申シマシ、龜少岡ニハ至ラテ數ガ少ナク、完全チモノハ一モ得マセシ、

チレカテ銀器チアリマス、ハ一體彫刻ガ細瑣チ銀器チアラ、模チ跡チ形ガ見エヌ而已チラセ、此ノ如ク色々ノ物ニ銀ノ鍍チ模チモノガ附イテ居ルカ或ハ銀器チアラテ、庶チ仕舞チ僅ニ此處ニ痕跡チ止ラテ居ルノチハチイカト思ヒマセカテ

東京地誌協會報告第十八年第二號

註ニ加ヘテ置キマシム  
 土器ノ人形ハ實際裝飾品デアリマスガ歐ハ多少宗教ノ意味ヲ含マテ居リマスガ  
 兎ニ角質用品デアリアリマセシガ假ニ實用ニ對シテ此中ニ入レマシム  
 獸類ハ四足獸ノ形ヲ成シタモノデアリマス從來本邦石器時代ノ遺跡ヨリシテ人  
 類ノ形ヲ模シタル土器即チ土偶ヲ出セルコトハ深田クゴウアイマスガ未ダ一個ノ動物  
 ノ形ヲ模シタル土器ヲ出ダレマセヌハ私共ノ私カニ奇ナリトシタル所デアリ  
 マス本邦石器時代ノ人民ノ土器ヲ造ルニ巧ナル其形狀ノ點ニ於テ及ヒ其紋樣裝  
 飾ノ點ニ於テ複雑精巧ナルモノヲ造リ又土偶ノ如キモ大小精粗種々ノモノヲ造  
 リタル由テ考ヘマシムレバ決シテ動物ノ形ヲ模シタル土器ヲ造ルノ技倆ナシト  
 ハ云ハレマセシ面シテ實際動物ノ形ヲ模シタルモノハ其實物ハ固ヨリ土器ノ附  
 屬物ニモアリマセヌハ紋等ガ一種ノ好惡ノ情ニ制セラレタル由リマスガ或  
 又一種ノ迷信ニ由リマスガ是レ從來私共ノ胸中ニ縹々疑問ヲモヤリマシム  
 然ルニ今固ニ於テ然レ一偶ノ動物ノ形ヲ模シタルモノヲ得マシタルハ  
 實ニ從來已知レ居ル本邦石器時代ノ人民ニ關スル事實ニ一大新事實ヲ加ヘ  
 ルモノト云ハナクテバナリマセヌ

- 201 -

品尾臺ニ及リ新地跡石器時代土器ノ圖シ能與申

次ニ廢物利用土器ノ廢物ヲ利用シタ例ガ一二見付カラスデアリマス固チ其  
 例ハ是レ實物ヲ示シタ高坏デアリマシモノガ高坏ノ蓋ノ所カラ折レタル子柄  
 シテ用キタラシム思ハレバ則チ當時ハ土器ト云フモノハ甚ダ式ガ巧ク増ト云  
 フコトガ分リマス  
 是ハ實物ヲ示シタ高坏デアリアリマセヌガ新ウ云フノハ上ノ方ガ破ラレシモノ  
 デ皿ノ如クシテ使ララルモノデアリマス  
 新ウ云フ風ニ廢物ヲ利用シタ例ハ龜少岡バカリデアリマセヌ武藏ノ大塚貝塚  
 原貝塚ニモ新ウ云フ例ガアルシレカラ下郷ノ山崎貝塚下郷ノ上坂尾村貝塚常  
 陸ノ椎塚貝塚陸奥ノ小島谷貝塚北海道後志ノ小樽貝塚等ニモ廢物利用ノ例ガゴ  
 ザイマス  
 曲玉ハ今度ハ完全ト曲玉ヲ得マセヌデアシタガ兎ニ角新ウ云フ曲玉ノ形ヲシタ  
 ノガ出マシム私共得マセヌデアシタレドモ前ニ完全ト曲玉ヲ得ル人ガアリマス  
 是ハ金屬時代ヲナシ石器時代ノ遺跡カラ出ルノハ充分ラテ居リマシタ曲玉ガ  
 石器時代ノ遺跡カラ出ルノハ龜少岡バカリデアリマス武藏ノ馬込村貝塚新地村  
 越江ノ有珠村北海道ノ小樽陸奥ノ小湊矢田細越トカ云フ所カラ曲玉ガ段々出テ

- 202 -

東京地學協會報告第十八卷

居リマス、  
 又丸玉モ武蔵ノ池袋村邊城ノ新地村羽後ノ御所野村カラ是ト途ハナイ様ナモノ  
 ガ出テ居リマス、  
 又土橋ハ石礫時代人民ノ風俗習慣ヲ觀ルニ甚ダ必要ナモノデアリマスガ其  
 礫山出テコトハ他ノ所ニ比シテ第一等ノ様ニ思ハレル、今マア多クノ土偶ヲ出シ  
 所ハ常陸ノ椎葉ヲ推シマスガ其椎葉カラハ二十八個出マシタ又羽後ノ御所野  
 カラ五個出マシタ、少レドモ龜少岡ハ從來已ニ發見シタモノガ十九個今度又ノ發  
 掘シマシタ、ガ二十一個程合計四十個程出テ居リマス、一少所カラコナナニ澤山  
 土偶ノ出ルノハ珍ラシ、龜少岡ハ澤山出ルベカリデナク土偶ガ澤山出ルノ  
 デアリマス、  
 シレカラ土偶ハ大小ノ差ガ非常ニ違ワテ居リマス、將ウ云フノハ直徑一寸アルカ  
 ナシテアリマス、大キナノハコンナ草片ガアリマス、是ハ想像スルニ直徑三尺モア  
 ラク、ラウト思ハレル、或ハ種々順序ガアリマシタ、大小ノ差ハ非常ニモノデアリ  
 マス、併シ形ハ割合ニ一定シテ居ル様ニ思ヒマス、御覽ノ通り大概變形ガ多ク、圓ノ  
 所ガ彫ラテ上下ガ細ナク、變形ガ一体ニ龜少岡ハ多ク、直徑アリマス、今度

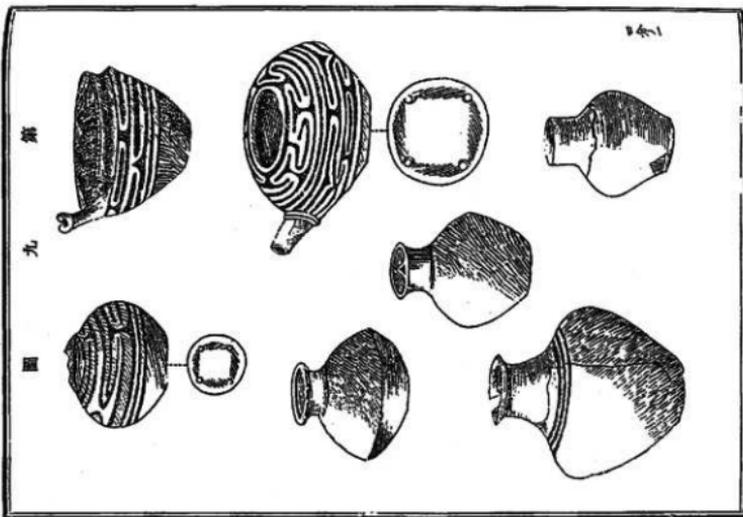
品見器ヒ及遺跡地跡電代時器石國少龜與隨

二百五十個程、マシタ、形ヲ以テ之ニ分類イシマス、ト重ノ形ガ十二、環ガ十  
 一、碗ノ形ガ二十三、壺ノ形ガ百三十八、德利ノ形ガ二十五、急須ノ形ガ二、其他諸ウ云  
 フ雜品デアリマス、前ニモ申シマシタ如ク完全ナ物ノ數ハ觀ニ多ク、マアマスガ  
 其形ノ種類ハ割合ニ少ク、マアマス、變形ノ物ガ殆ト全數ノ十分ノ七ヲ占メテ  
 居リマス、  
 シレカラシテ完全ナ物ガ澤山出ルノハ實ニ龜少岡ガ第一デアリマス、唯今マア大  
 津及常陸ノ椎葉カラ完全ナ物ガ澤山出テ申シマシタ、ガ其大津カラ出マシタモノ  
 ノハ大津介遺著ニ依テ見マス、ト完全ナ物或ハ完全ニ近イ物ガ二十個、又椎葉カラ  
 ハ百個、余リ出マシタ、之ニ龜少岡ノ今回一回ノ發掘二百五十個、較ベテ見マス、ト精  
 ト比較ニシテ、ナイ況ノ龜少岡ハ是マア掘リマシタ、ガ三千カラアルト云フコト  
 デアリマス、カ到底椎葉ハ大津ハ比較ニナリマセ、此ノ如ク澤山完全ナ物ガ出  
 マシタト云フコトハ到底通例ノ遺跡ヲ以テ説明スルコトハ出來ナイ、故ニ數ハレ  
 テ立退イタトシタ、ナラバ多少其遺物ヲ分捕サレ、モ、イ、シレカラ自然ノ必  
 要ヲ違テ立退イタトシタ、ナラバ或ハ五トカ何トカ貴重品ハドウシテモ携帶シテ  
 行ラ、相違ナイ、ラウト思ヒマス、シレテ之ヲ海國若クハ洪水ノ如キ一種ノ天

東京地學協會報告第十八號

長地總ア以テ其處ニ遺物ガ埋没シテ居ルト致シマシレバ完全ナ物ノ澤山出ルコ  
トノ説明ガ出来マス又低イ泥炭層ノ中カラ出ル説明モ出来ルノデアリマス、  
以上大体ノ御話アゴザイマスガ此後貨物ニ就テ御質問ガアリマシタラバ私ノ  
知ラテ居マスガカハ御答ヘ致シマス長ク清點サテシマシテ恐縮ニ堪ヘマセン

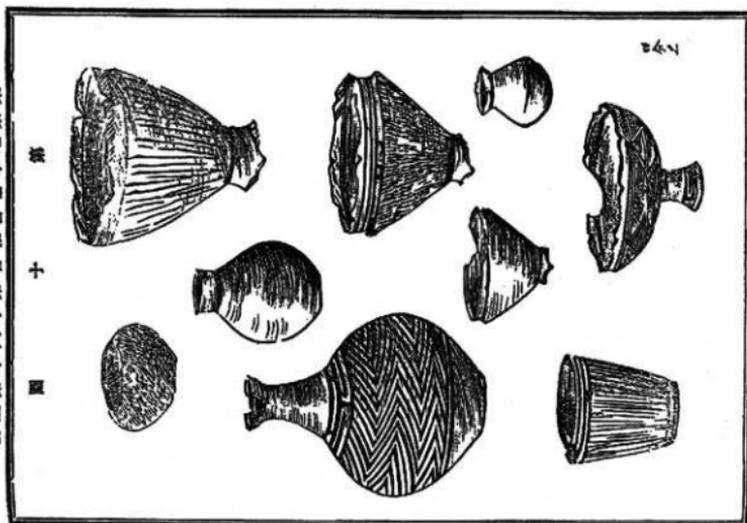
關東及近畿地方舊石器時代之石器圖



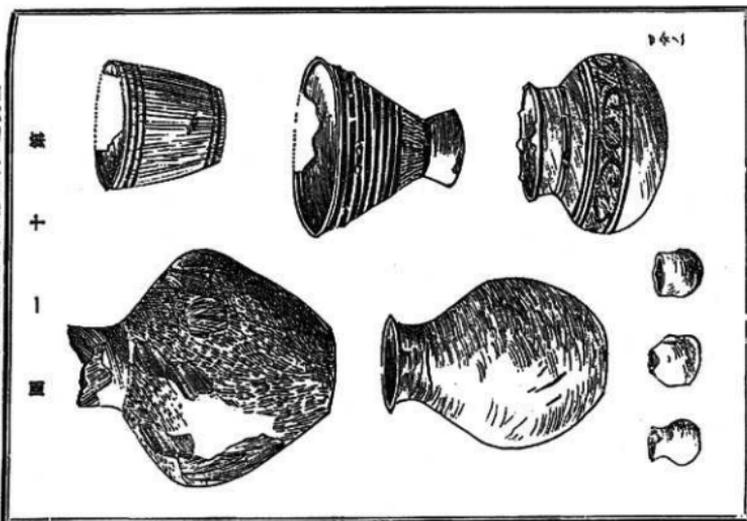
九

九

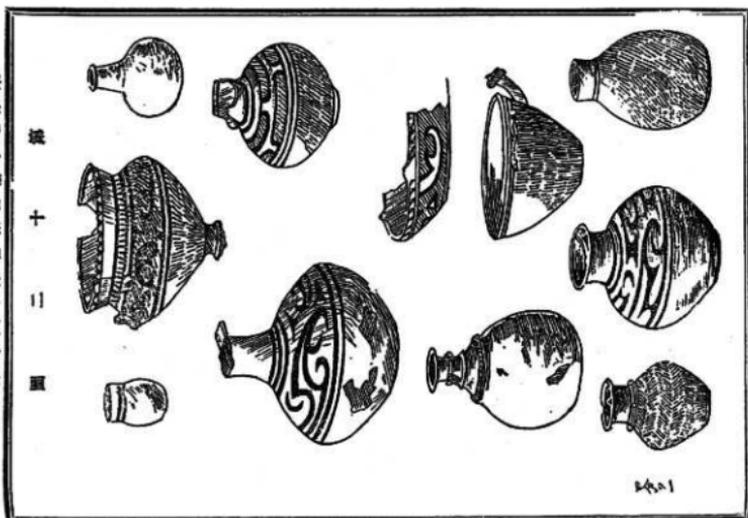
東京地學協會報告第十八號 第二卷



鹿島及野田地誌 遠古石器圖之五

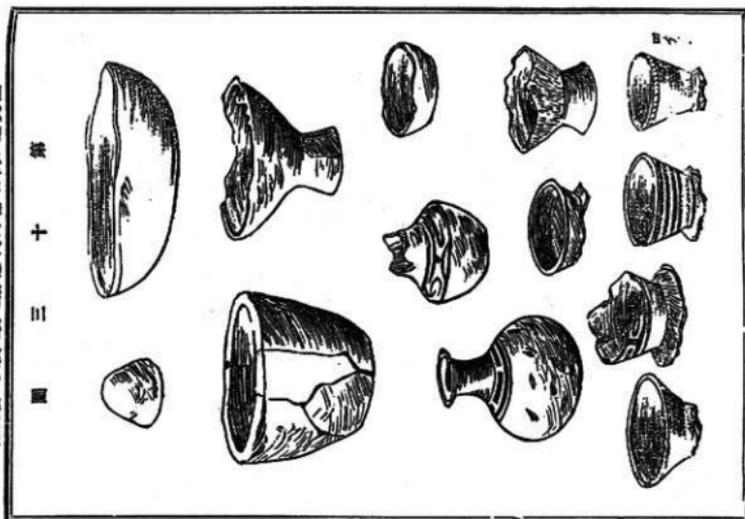


號二第年八十第告報合協學地京東



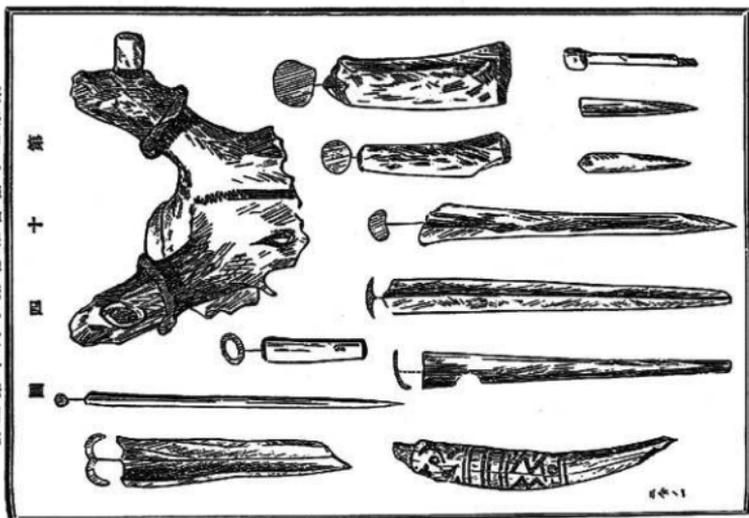
- 209 -

品見器石及東地勢地時器石圖之龜吳臨



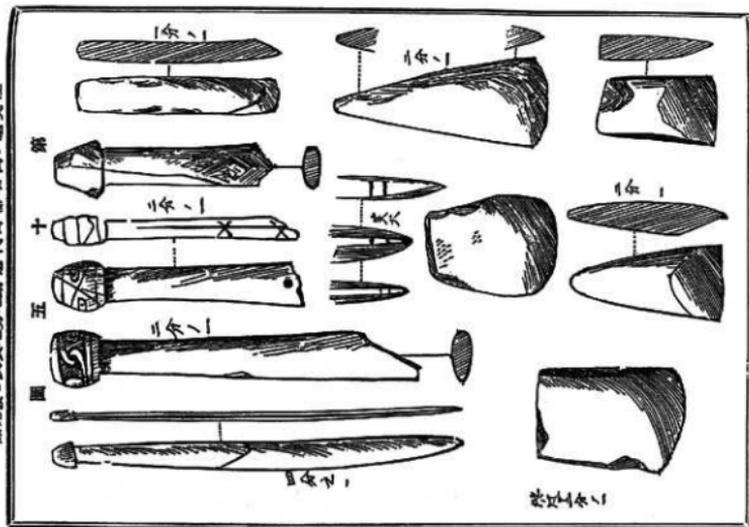
- 210 -

號二第年八十第告報會協學地京東



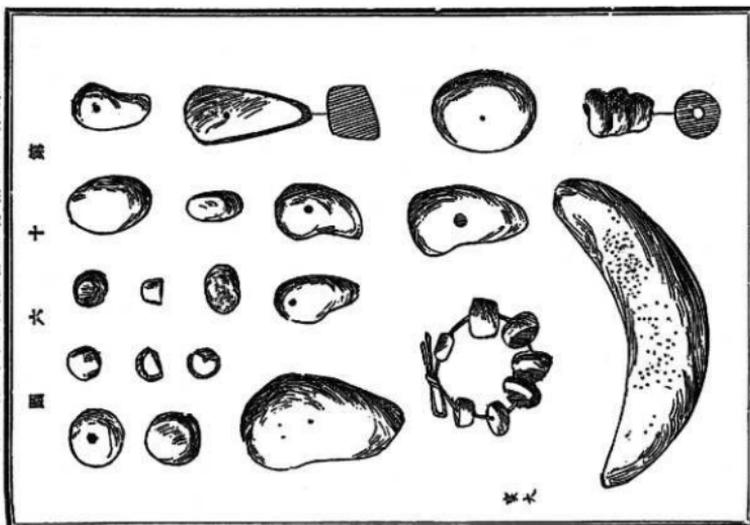
- 211 -

品見器七及質地物地將重代時器石圖七龜吳陸



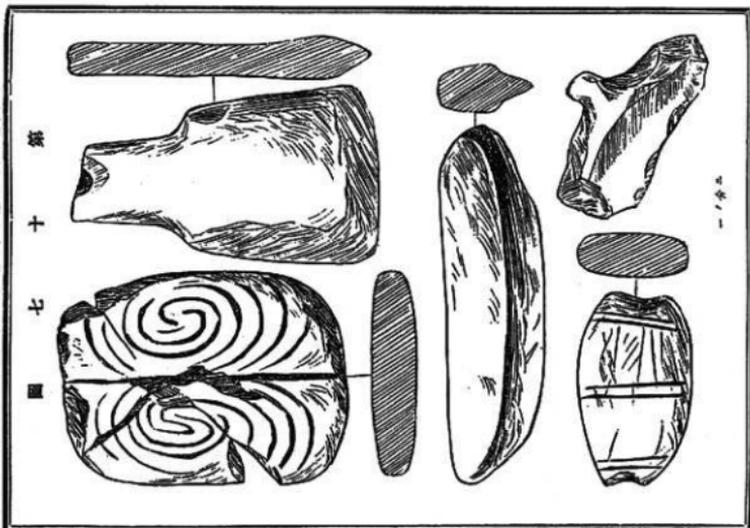
- 212 -

東京地學協會報告第十八號 第二號



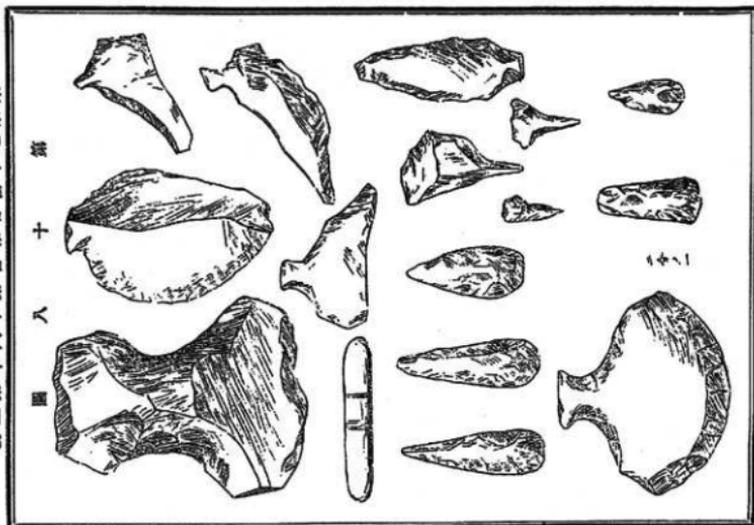
- 213 -

與龜石面時代的普通地物及其見品

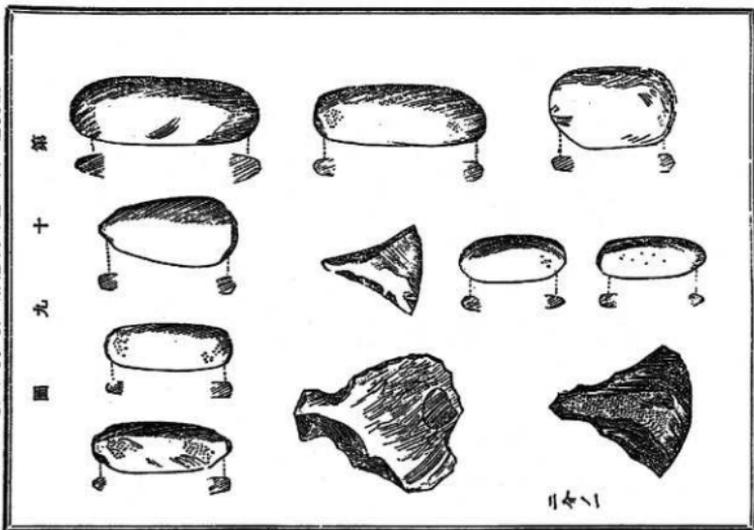


- 214 -

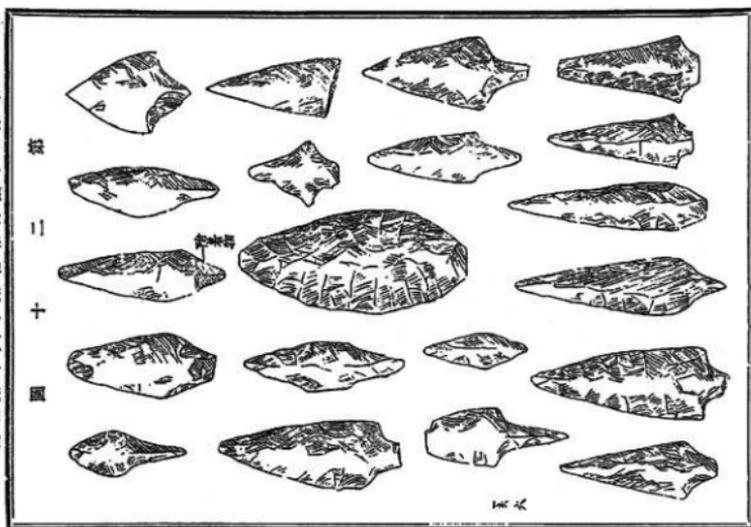
東京地學協會報告第十八號



陸奥關石時代器及石見品

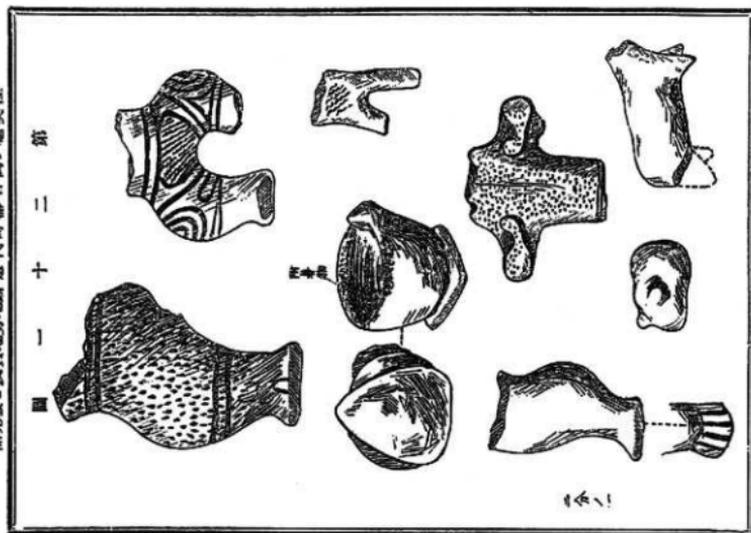


東京地學協會報告第十八號 第二號



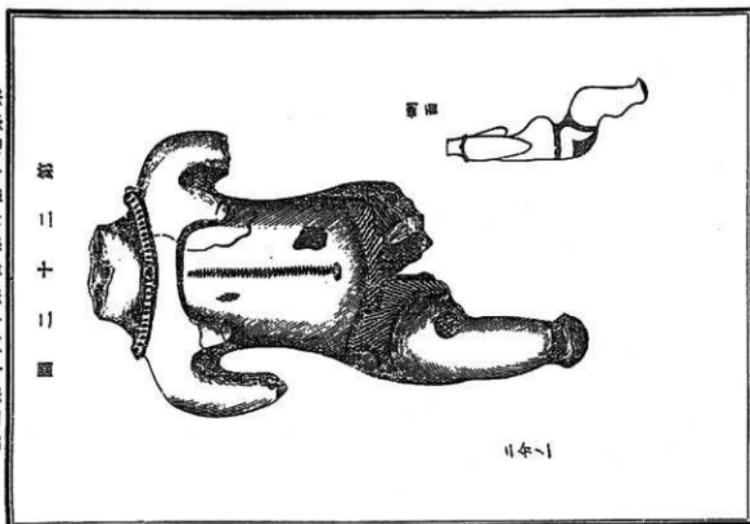
- 217 -

東京地學協會報告第十八號 第二號

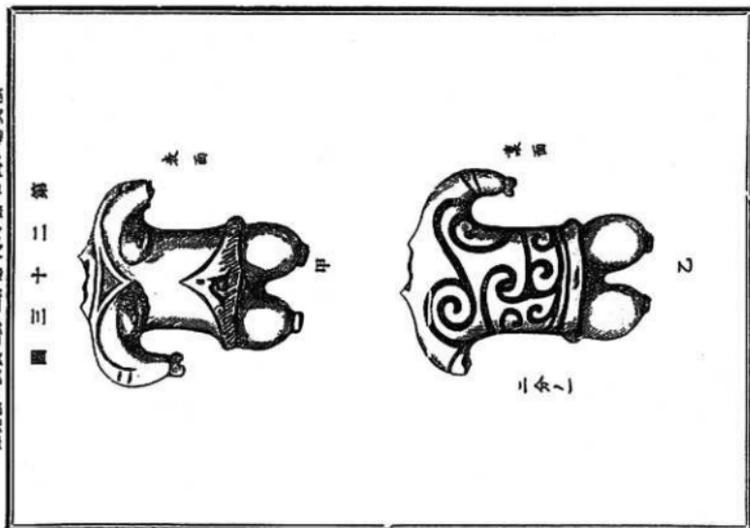


- 218 -

東京地學協會報告第十八號



陸奥龜石時代埴器及土器品見



附圖略解

- 第一圖(甲)ハ磁石附近ノ地圖ヲ示シ(乙)ハ該奥國ニ於ケル磁石ノ位置ヲ示ス  
 第二圖磁石ノ磁場發見ノ景況ヲ田小用野ヨリ望ミタル見取圖  
 第九圖磁石ノ磁場ヲ示スル土器ノ殆ト完全ナルモノヲ示ス  
 第十圖同上  
 第十一圖同上  
 第十二圖同上  
 第十三圖右ノ下ニアル楕圓形ノモノハ高杯ノ蓋ヲ倒シテ更ニ利用シタルモノ、  
 左ノ上ニアル圓錐形ノ者ハ内部充實セル一個ノ土器ニシテ其用ヲ詳ニ  
 セズ其他ハ全上  
 第十四圖角器及ヒ骨器右ノ上ニアルハ鹿ノ角ヲ用フルニ從テ切り取リシ及ヒ切  
 リ取り掛ケテシ跡  
 第十五圖石器類  
 第十六圖球玉類右ノ下ノ螺旋狀ノ者ハ土器ニシテ長軸ニ沿テ孔アリ、朱色ノ漆様

- ノモノヲ以テ發シアリ  
 第十七圖左ノ上ニアル四角形ノ者及ヒ下ニアル楕圓形ノ者ハ岩盤其他ハ石器  
 第十八圖石器類  
 第十九圖瓶七及ヒ楕圓形ノ右ノ附録ヲ發シテ磨キアルモノ、其兩極ニ相當スル所ニ  
 細キ點々アルニ注意スベシ  
 第二十圖石鏡  
 第二十一圖土偶類右ノ下ニアル二個ハ動物ノ形ヲ模セル土器中央ニアル脚部ノ折  
 レタル所ニ黒色ノ漆様ノモノ附著スルニ注意スベシ  
 第二十二圖妊婦ノ狀ヲ示ス土偶腹部ノ膨大ナルニ注意スベシ  
 第二十三圖土偶

# 自然科学の手法による 遺跡・古文化財等の研究

——総括報告書——

## 縄文後期・晩期の低温性遺跡と環境復元

——福井市浜島遺跡、青森県亀ヶ岡遺跡の調査例——

市原 寿文, 山 内 文, 井関弘太郎  
 野須 孝雄, 大西 晋二, 加藤 芳郎  
 金子 浩昌, 長谷川麻雄

### I. はじめに

縄文時代の後期・晩期になると、全国的に低温性遺跡が増大することは広く知られている。本研究が低温性遺跡と称している遺跡は、遺構や遺物を含む層の一部ないし全部が、埋沖積層下に埋没しているような遺跡を指しており、埋沖遺跡なども含めて述べている。

全国の低温性遺跡を概観すると、縄文後期の最晩な時期からその最末遺跡に形成された地形地形と深いかわりがあるように認められる。

以上のような状態に立って、本報告書は後期・晩期以降の遺跡の地形環境の復元とその形成過程、及び埋没程度の違いなどをテーマとして上記2遺跡の調査を行った。

両遺跡調査一行において、埋沖積層下における砂層表層までのボーリング調査を行い（調査においては、リソッチ発掘目的）、砂層表層の地形状況や深淵で発見した、その他、珪・花粉・堆積・砂の分析から、遺跡形成における風立・氷成環境の復元、及び地形の形成過程を知るのに必要な諸資料を収集した。

本研究が埋没調査対象とした遺跡は2例にとどまるが、可能な範囲内で後期・晩期埋没性遺跡の環境復元と埋没の理解に必要な資料の一つを提供し得たと思っている。

調査結果を述べるに先立ち、木越邦彦（『C 年代測定』、高松書局・美術一展（埋没遺跡調査））、越後谷彰一・村庭 洪・塩原誠型・若木繁博・水沼町教育委員会との協力におけるお礼の言葉を述べるとしていただく。

（中略 再文）

### II. 低温性遺跡における地形環境の復元

(1. 福井市浜島遺跡の調査 省略)

2. 青森県亀ヶ岡遺跡の調査

(1) 埋没地（伊風山）の地形と地質

津軽平野の最南には伊風山と呼ばれる丘陵が岩木山の北西から十三瀬の南まで、北東一南西四

文部省科学研究費  
 特定研究「古文化財」総括班

昭和55年3月

## 144 吉 澤 肇

方向約28kmにわたって続いている。幅3-5kmのこの丘陵の東部には、津越平野に面して南からの湧水が点在しており、亀ヶ岡遺跡もその一つである。

栗山山のうち多くの部分、とりわけ北斜面は新形砂丘地帯で覆われているが、栗山山の本体は山頂部(小原は、1983)または北山頂(小原は、1986)と呼ばれる中丘段丘頂部(下式相層 III: 北、1965; 太田、1986)によって構成されている。

遺跡北側の(伊佐山)は、13mを隔す砂丘が連続され、最上部には25cmの黒砂層と110cmのローム層(伊佐山北山頂、小原は、1983)が覆っている。ローム層より約2.5m下位には動物骨を多く含む暗褐色砂質シルト層が3枚(12-22cm)挟み、ミツガシラの種子化石を多数含む。

近江川周辺では古形砂丘帯は認められないが、西南方向に少し離れた羽津山周辺、ベンゼン東側などには、ローム層の下位に古形砂丘の風成砂層が認められる。風成砂層の下位の水成砂層との間に地殻的である、すなわち、亀ヶ岡付近(栗山山中部地帯)で観察される限りにおいては、山頂部の地殻面が凍水した直後に古形砂丘が堆積する傾向が強く、面積約25m<sup>2</sup>の山頂部を形成したことになる。

ローム層ではおおむね山頂部は、上段丘陵と平野部の間で切りわり、ここより西は出来島(小原は、1980)と呼ばれる面積約12m<sup>2</sup>の段丘頂上である。この面上には新形砂丘が形成されている。新形砂丘の最下部約2mは、5-20cmの泥炭層と5-25cmの砂層とが8回にわたって互層する。泥炭層はいずれもいわゆるマッシュアップ状であるが、下位のものは砂粒をほとんど含まず、上位のものは樹皮のよい中粒砂を多量に混入する。一方、砂層は下位のものにあっては砂質じり泥炭層の層状を呈するが、上位のものになると樹皮層を全く含まなくなるとともに、層状の層が強化し重くなり、しばしば1mを越すようになる。砂層はいずれの層の場合もよく円筒状の土法柱であり、フィン層による気泡を空けて液状状態を呈するが新形砂丘の砂と同質のものである。新形砂丘の形成に伴って風で運搬され、冷-止水層中に堆積したものと想われる。

これらの砂、泥炭互層は出来島(小原は、1983)と呼ばれ、その14C年代は高橋・塚崎(1972)によると2,980±90年B.P.(Gak-1223)であったことである。今回、大津池の北西の部片で採集された新形砂丘の14C年代は2,460±100年B.P.(Gak-7940)という14C年代値を示した。

出来島の風下には、上位より粘土層(厚さ43cm)、泥炭層(110cm)及び泥炭質粘土層(約100cm)が堆ち、西に下位には砂層が堆く、これらの層はよく混ざり合っている。泥炭層の下部からはミツガシラの種子が多数見られ、下部10cmには大きな粘土が堆積している。泥水のうちの一つ、トウモロコシ(栗山山頂)の葉の残骸の14C年代は25,710±90年B.P.(Gak-7941)であった。この地層は出来島と同じ山頂部(小原は、1983)と見られる。泥炭層の西側には現在があるが、詳細については七里塚遺跡で述べる。

現在の地形は、すなわち7世紀長狭は亀ヶ岡遺跡からわずか3.7kmしか離れておらず、遺跡から小1時間以内で栗山を越えれば日本海に出られる。しかし、少なくとも縄文時代末までの地形は現在の地形と異なる。その理由は泥炭層を堆積した沼澤に成りかかっていたことによる。なお、出来島上に分布する土層や泥炭は、古い地形面によるものであり、はるかに数多く、面積も広い。過去数十年の間には新形砂丘を形成する砂の採取によって沼の面積縮小と、沼の水質劣化が進行したことを認めており、亀ヶ岡遺跡が営まれていた当時の環境が現在のそれ

とは著しく異なっていることは想像に難くない。

亀ヶ岡の沼、沼澤の北側にある小谷の北端では、山頂部を侵蝕した谷地形を埋積した最大厚7m以上の泥炭層(生土と砂層)が見られ、最上部は黒ボク層(50cm)とローム層(50cm)によっておぼれる。堆積物主体の赤土化は山頂部とは異なる。ローム層は埋積谷の中で2層に分かれ、間に砂層を挟み込んでおり、この地層が山頂部(伊佐山)と同一層(岩木山頂)の山頂部(伊佐山)で形成されたものであることを示している。堆積物の上面は細面や亀ヶ岡付近の山頂部(伊佐山)と小規模な分布する。亀ヶ岡遺跡の下位に採集する動物骨が黒い砂質シルト層中に立派な木片である。なお、上位の堆積物の下位に採集する動物骨が黒い砂質シルト層中に立派な木片の14C年代は33,130<sup>±</sup>4,270年B.P.(Gak-7739)であった。

今回採集した近江川やから谷段丘状砂丘のように、栗山山頂部に封まれた小谷は、山頂部の形成後、上位の山頂部(伊佐山)で形成されたものである。亀ヶ岡遺跡の下位に採集する動物骨が黒い砂質シルト層中に立派な木片の14C年代は33,130<sup>±</sup>4,270年B.P.(Gak-7739)であった。

山頂部(伊佐山)の形成後、上位の山頂部(伊佐山)で形成されたものである。亀ヶ岡遺跡の下位に採集する動物骨が黒い砂質シルト層中に立派な木片の14C年代は33,130<sup>±</sup>4,270年B.P.(Gak-7739)であった。

山頂部(伊佐山)の形成後、上位の山頂部(伊佐山)で形成されたものである。亀ヶ岡遺跡の下位に採集する動物骨が黒い砂質シルト層中に立派な木片の14C年代は33,130<sup>±</sup>4,270年B.P.(Gak-7739)であった。

山頂部(伊佐山)の形成後、上位の山頂部(伊佐山)で形成されたものである。亀ヶ岡遺跡の下位に採集する動物骨が黒い砂質シルト層中に立派な木片の14C年代は33,130<sup>±</sup>4,270年B.P.(Gak-7739)であった。

山頂部(伊佐山)の形成後、上位の山頂部(伊佐山)で形成されたものである。亀ヶ岡遺跡の下位に採集する動物骨が黒い砂質シルト層中に立派な木片の14C年代は33,130<sup>±</sup>4,270年B.P.(Gak-7739)であった。

山頂部(伊佐山)の形成後、上位の山頂部(伊佐山)で形成されたものである。亀ヶ岡遺跡の下位に採集する動物骨が黒い砂質シルト層中に立派な木片の14C年代は33,130<sup>±</sup>4,270年B.P.(Gak-7739)であった。



図7 亀ヶ岡遺跡位置図(国土地理院、2万6千分1「東紀」[全米]「全米」参照)  
A-Bはボーリング地点、A-B-E子は林状地の位置を示す)



期前半の生活が営まれたこと。筑前・近江沢の埋没凹地は深い凹地であり、亀山丘麓東方には埋没砂層上の浅い凹地が埋没している状態を復元することができる。遺跡周辺の古植生に關しては、H27の花粉分析結果を参照された。

(金子 浩 品, 那須 幸樹, 西原 寿文)

### (III) 初期の粘径組成分析による低湿性遺跡の環境復元 (省略)

### (IV) 低湿性遺跡の環境復元と環境分析 (省略)

## V. 調査結果の総括

本研究が調査した筑島・亀ヶ岡遺跡において、遺物が泥炭層中にも散在していることから、遺跡のパターンとしては従来言われてきた泥炭遺跡に属する。しかし、縄文時代の泥炭遺跡は、集落跡などから孤立した割面に存在しうる遺跡ではなく、遺跡としては集落跡を中心にして、窪地凹地の一部に泥炭の堆積するような窪地の一面を取り囲んでいたと判断するほうが妥当に思っているということができる。以上のような判断に基づいて、泥炭遺跡という表現を用いることなく、低湿性遺跡と呼んでいく。

縄文後・前期に営まれた低湿性遺跡の環境としては、縄文海進の最高水準期からその海退過程に形成された沖積地形を概観することはできない。本研究が調査した遺跡においては、遺跡の周辺に縄文海進が現した礫食台や、海退に伴って堆積が進行した沖積扇上埋砂層表面などの特長な地形面上に、泥炭層が形成されるような淡水水域を伴うという共通点が認められる。また、集落跡に接して表層水域に下される各地形が後に閉鎖され、泥炭層の堆積する深い埋没凹地が伴っていることも共通している。

筑島遺跡は縄文後期前半に、亀ヶ岡遺跡は早期前半を中心とする互が空まれた遺跡であるが、各地上の集落跡、これに接して見られる平坦な地形上の淡水域と埋没凹地など、遺跡経路時における地形のコンプレクシオンには余りにも共通点が多く、偶然とは言えないように思われる。調査結果には、研究目的の性格から遺跡範囲内を行わないで調査を進めてきた。そのために調査結果にも制約を伴うのであるが、筑島遺跡においては後期前半の層序において、亀ヶ岡遺跡においては後期前半の層序から、花粉分析によって栽培植物の花殻を抽出し、原葉はその結果から原葉付植物を指摘した点である。今後遺跡の遺跡範囲内の調査を行いながら、花粉分析の分野から抽出された埋没凹地を調査し、考古学の分野においていかに位置付けられるかの検討を深めていかなければならない。今後、以上の調査結果を普遍化して理解しようとする資料が増えるならば、縄文後期・前期低湿性遺跡の埋没凹地は、縄文海進以後の沖積凹地における埋砂・埋土等の環境変化に対応する重要な行動と理解することも許されるであろう。(井岡弘太郎, 那須 幸樹, 西原 寿文)

## 引用・参考文献

- 野野田謙三・三浦 静・田島隆雄(1960): 福井県三上郡高砂丘陵の縄文後期後半の遺跡について。『福井県史』第2号 自然史学, 16号 4頁。
- 渡辺成雄(1960): 風土記の成立年代のC-14年代測定研究, 5, 157-168。
- 水田謙子(1963): 田代湖の底泥からみたら古四紀の $^{14}C$ 年代および $^{14}C/^{12}C$ 比と地層の関係。『第四紀研究』17, 117-124。
- 三笠秀夫(1965): 海津砂丘の形成について。『第四紀研究』4, 5-12。
- 水野 繁・田村静雄・飯野島雄(1963): 海津砂丘。『佐藤信淵(1860): 陸奥亀ヶ岡遺跡時代の泥炭地形成原因及炭化品』。地学協会雑誌, 18。
- 三田幸次(1959): 亀ヶ岡遺跡—青森県亀ヶ岡遺跡地質調査報告。『東北大学農学研究所報告』第8号。
- 青森県教育委員会(1974): 亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書。青森県文化(埋没遺跡)調査報告書第14号。
- Fuzumoto, G. M. (1961): Distinction between dunes, benches, and river sands from their textural characteristics. *J. Sed. Petr.*, 31, 514-529。
- 三笠秀夫・赤木三郎(1972): 山形県高砂丘陵の砂丘の形成過程。『東北大学博士学術論文選集』(地理学), 49-54。
- 三笠秀夫・前田浩三・杉山三郎(1973): 東北地方の砂丘(古砂丘)について。同上, 49-48。
- 山形砂丘の地形。『東北学術』第2号, 34-42。
- 小島隆雄・三比呂重・島田高彦・竹内貞子・石田重雄・藤原正(1963): 岩手県高砂丘陵十三塚遺跡の沖積層。『東北大学地質古生物研究所報告』第2号, 1-96。
- 水田謙子(1963): 田代湖の底泥からみたら古四紀の埋没凹地に関する二・三の考察。『地質学雑誌』2, 2号, 15-24。
- 高橋 一・塚本謙彦(1972): 出来崎層の $^{14}C$ 年代。『第四紀研究』第2号, 39-43。
- 野山恒雄・水下方南(1970): 陸奥野宮の埋没砂丘。『東北教育大報』29巻(人文, 社会学), 191-208。
- 新藤古砂丘グループ(1967): 日本海岸の古砂丘について。『第四紀研究』6, 19-28。
- 本井子太郎(1970): 石狩沖積扇帯の砂丘地形と砂丘の形成過程の概観。『日本地質学会年報』10, 69-70。
- 上杉 勝(1972): 延慶紙分布からみた埋没砂丘・埋没凹地の関係。『第四紀研究』11, 49-60。
- 近代地質(1967): 日本海岸線の沖積砂丘について—とくに高砂丘陵砂丘について—。『日本地質学会年報』10巻(地質学)第4号 4頁。



164 縄文・弥生・埴原遺跡における石片の状況

10, 7-2), フリ刀風 (Nos. 11, 7, 5), カナメダラ (Nos. 11, 10, 6, 5, 2, 1), タテ風 (Nos. 7, 5, 3-1), エゴム (Nos. 11, 10, 2), イネ (Nos. 11, 9, 7, 5-1), カヤツリガキ (Nos. 11, 7, 5-1), ヘサキメダカ (Nos. 11, 3) などが見られ、No. 5 より土に混入しているものとして17カマツ (Nos. 5-2), スズ (Nos. 4, 2), キヤツリガキ (Nos. 3), カナバキ (Nos. 4, 2, 1), マツカワ (No. 2), ナス (Nos. 3, 2), ハコバシ (Nos. 4, 2, 1), ノミノクマ (No. 3) などが挙げられた。なお、No. 2 にはトリノ風が確認できない。

イネの形状は No. 1 と No. 3 に特によく、No. 1 のものはすべて炭化しており、炭化を伴ったものが多い。No. 6 では炭化している個数はむしろ少ないが、No. 9 と No. 11 ではほとんど炭化しているものが多い。No. 12, 13, 9, 8, 6, 5 が多い。

(3) 使用する考査遺物と縄文晩期の遺物を含む層について  
分析的に打ち分けられたと思われる石片が多く含まれている。土器片は No. 13-1 に含まれ、そのうち No. 11, 9, 7-5, 3 に多い。いづれも磁片なので土器片の特定の個数も不明だが、田原野文氏によると、No. 13, 9, 4, 2 の土器片の一部は縄文晩期のもので大洞 C 式土器と判定されるものを含んでいることである。

石片は、明らかに人為的な加工の産物と認められるフリヤ、チャップのみについてみると、徳島県が No. 12-9, 7-4, 2 に認められ、兵庫の小さな磁片も No. 11 と 9 に少数認められた。なお、表面が赤色平滑で裏面が褐色で粗くざらざらした磁片が No. 12-10 及び No. 1 から産出したがいずれも少ない。

その他、小さな磁片が No. 12, 11, 9, 7 に認められ、特に No. 11 と 7 に多い。魚鱗の層と骨片は No. 13-11, 9, 4 に認められ、兵庫の小さな磁片も No. 11 と 9 に少数認められた。なお、表面が赤色平滑で裏面が褐色で粗くざらざらした磁片が No. 12-10 及び No. 1 から産出した。

上記のような考査遺物の産出個数の変化から、亀ヶ岡遺跡が主として定まれた縄文晩期前半の層を代表的に示していることが見て取れる。しかし基本的な層序は藤沢式土器が展開した(田原野文 1989) 沢原の A 及び B トレンチのそれとよく一致している。すなわち、今回採った H27 の層 No. 1-3 が三田守(1989)の第 I-II 層、No. 4-9 が第 IV 層、No. 10-13 (または 14) が第 IV 層、No. 15-25 が第 V 層とそれぞれ相当するものと思われる。第 IV 層が完全土器を定する層序となることと、No. 13 から 14 の層にフリヤ及び骨片が、No. 12 から 13 に炭化した魚鱗の付加によるチャップと確認が出現することを考え、No. 10-13 (厚度 119-200cm) が第 IV 層、すなわち縄文晩期の層序に相当するものと思われる。

(4) 縄文晩期の土器片について  
沢根 H27 晩期の No. 13-10 層序での土器片層序で特徴的なのは、No. 13 においてヨケギ(赤銅・銅・鉄)のチャップ(No. 14, 2)と、アサギ、ナゲシコ料など、林縁や荒地に多く見られる植物の痕跡が集中し、更に No. 12 になると、チャップ(No. 7カマツ)が急増することである。すなわち縄文晩期になって居住が始まるとともに植生の部分的な変化が行われ (No. 13)、その空間に局地植の層が侵入する。しかしこの段階では2次林はまだそれほど発達していない。ところが次の段階 (No.

164

古 蹟 集

12) になったツバの状況が開始される。同時に雑草性雑草も増加し、二葉マツ(ノコギリ)の2次林も発達する。この間からワユロが出現するが、このワユロが単に雑草が促進された後の間隙に侵入したにすぎないかは、まだ定かでない。これは雑草でないのは雑草類として認められる。明らかにこの間、またその前後、いずれにか、森林が破壊された後の空間を埋めたる雑草の一員であろう。

もう一つ興味深い現象は、No. 12 におけるツバノキの急増である。亀ヶ岡遺跡が本格的な遺跡となるようになった時点で既にツバノキが出現し、その数はかなりの割合を占めることとまでにはなっていない。一方はトリノ風が減少せずむしろ増加していることは、縄文晩期後半と同様にツバノキが減少した人々によって、ツバノキが主要な食料品の対象ではなくなったことが示されていることと相俟して、花影の増加が考えられる。花影の増加が急増するアサギは、トナリの成長に由来した2次林と考えられることが多々ある。

アサギ2次林は、No. 10 で再び減少し、草本花影やツバノキの層序よりも少なくなる。代わってツバノキが増加するが、この層序ではツバノキの花影は認められない。更に述べると No. 13-10 が縄文晩期前半であるが、その上部の時代には亀ヶ岡人の活動痕跡が著しく細小したことを反映しているのではなかろうか。

(5) 植物について

H27 植物の分析結果でイネ類と思われる花影が安定して出現するのは No. 8 以上 (-100cm 以下) である。この時代についてはイネ類が不明であるが、極めて新しい時代と思われる。その理由は No. 4 以後ではワユロコウムの花影が認められること、カナバキやワユロコウムのような炭質植物の種子が出現し、植物によると思われるスズ花影の急増が見られることなどによる。

注目すべきは、縄文晩期前半の No. 11 から土器片、徳島県産のチャップ、小骨片、魚鱗、貝殻片、骨片などとともに炭化した穀類の磁片が検出されることである。このことは当時の亀ヶ岡の人々が交易によって穀(粟)というものを知っていた(入手していた)ことを意味している。しかし炭化した穀類を好むイネにとってもこの地方の気候が余りよくあつたのであつた。縄文晩期前半にはイネ類がほとんどこの層序にはできなかったことである。これはイネの品種改良が非常に遅く遅いからである。

4. 縄文晩期・晩期における低地利用について

地質的に立地条件の乏しい、沢根、亀ヶ岡両遺跡における低地の空間は異なる点がある。いづれの場合も縄文晩期前半に形成された低地は縄文晩期後半には異なる。これは、No. 8 以後はワユロコウムの花影が認められること、カナバキやワユロコウムのような炭質植物が集中し、更に No. 12 になると、チャップ(No. 7カマツ)が急増することである。すなわち縄文晩期になって居住が始まるとともに植生の部分的な変化が行われ (No. 13)、その空間に局地植の層が侵入する。しかしこの段階では2次林はまだそれほど発達していない。ところが次の段階 (No.

12) になったツバの状況が開始される。同時に雑草性雑草も増加し、二葉マツ(ノコギリ)の2次林も発達する。この間からワユロが出現するが、このワユロが単に雑草が促進された後の間隙に侵入したにすぎないかは、まだ定かでない。これは雑草でないのは雑草類として認められる。明らかにこの間、またその前後、いずれにか、森林が破壊された後の空間を埋めたる雑草の一員であろう。

古 蹟 考

166

カナムグラは鳥ヶ岡の明では縄文時代に既に増化していたことになる。今回調査した縄文遺跡の明による増化ではカナムグラ、イボクサ、スベリヒヨコなどはコナギやカナムグラよりもずっと遅く増化したようである。

次に水田遺跡についてであるが、近年数多く出版される考古学関係の論文や雑誌報道の中で、水田遺跡の遺子や花畑の出現とその関係によって水田遺跡の存在を証明しようとする論調が一部にみられる。確かに所蔵品、鳥ヶ岡の今田の調査で種子や花粉、炭子が検出されたコナギ、ミズアオイ、イボクサ、オモダマ、ヘラオモダマ、ミズウツギ、オオウツギ、サンショウカサネなどはつい近年まではやっやっかいた水田遺跡であった。しかしこれらのうちコナギとイボクサを除く他の種は定評初期、なかには定評中第三紀の時代から日本列島に存在していた植物であり、本来の生習地が人間によって奪われてしまったため、水田という特殊な人為的環境へ運ばれ侵入したものと考えるべきである。したがって水田遺跡の検出は、水田が存在したことの直接的証拠とは限り得ず、あくまで傍証にとどめるべきであろう。

(II) 権井市浜島遺跡出土村の植物学的識別 (省略)

引用・参考文献

原田 厚 (1979) 稲本遺跡調査報告。縄文定評学誌、  
 御川文化 (1943) 谷津地区植物について。植物分  
 類学雑誌、13、294-298。  
 水島正吾 (1956) 旧名品川流域の浮草植物群。  
 資源調査誌、40、98-109。  
 三田尻学 (1959) 鳥ヶ岡遺跡—浮草植物群調査  
 聖徳大学の研究—。考古学、民族学季刊、第3  
 冊 (臨時第5冊)、有隣堂出版、1-156。  
 中山幸一 (1957) 下北半島青森県白根、資源調査誌、  
 40、78-80。  
 山内 文 (1957) 下北半島の稲本遺跡より得られた  
 炭子について。資源調査誌、43-44、21-25。  
 woods of the unmanaged forest of Utsu,  
 Toyama, Japan. Rep. Tohoku Imp.  
 Univ. (Gen. Bot.), 14(3), 266-311.  
 鈴木忠生・中村 芳 (1977) 野付花畑の植物に關  
 する植物学的研究。本邦植物誌臨時増刊「古文化  
 財」(植物の起源と分布に關する部分分析の  
 研究—「野付花畑」(中村編)、1-10。  
 工藤徳次・山内 文 (1956) 下北半島青森県より  
 得られた炭子について(第1報)。資源調査誌、  
 40、78-80。

165

縄文後期・新石器後期遺跡における植生の復元

II期の場合、ハンノキの急増期—減少するまでハンノキ林の林床で水稲を作ることは認められず、陸田の可能性もある。しかし東照橋遺跡の一つであるコナギが同時に出現することを考えたと定説編の一部で水稲耕作または何かしかの栽培 (栽培) を行っていた可能性を論じているわけはない。

鳥ヶ岡遺跡の場合には耕作の可能性もなく、それと代わる低地農耕の可能性を暗示するような植物も今のところ発見されていない。鳥ヶ岡の縄文後期人が岡のたもとに低地地へ向かい耕作を行ったのか全く不明と推定できるが、岡に送られたように当時の人が岡に取 (掘) というものを入手していたということから考えると、彼らが水稲耕作を夢見ない結果として泥炭層形成の中間が起ったという可能性も考えられるのではあるまいか。

5. 史前縄文地帯と水田遺跡について

御川文化は1943年に「史前植物化石」という報告を掲載し、その例としてコナギやカナムグラなどを挙げていた。今回の調査によって「水田遺跡」では縄文後期前半の時代にコナギが既に出現し、それと存在していた同属のミズアオイと交代したことが確認された。この時代は耕作及び水稲栽培の開始期と一致しているが、岡に送られたように耕作が水稲耕作であったのか、または無耕作であったのかは明らかでない。現在では水田遺跡として知られているコナギの出現と耕作の開始が一致していることと考えられる水稲耕作のようには思えないが、もし栽培耕作であったならば問題のコナギは栽培植物の一つとして、すなわち野菜として導入された可能性もあり、今後に残された問題の一つである。

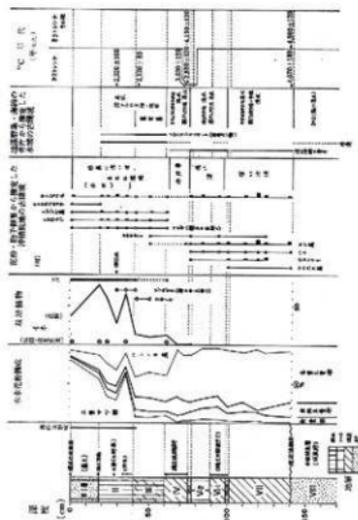


図 3 権井市浜島遺跡 1977年度第2トレンチにおける新石器後期地層



圖 2 砂丘の堆積の過程の模式図

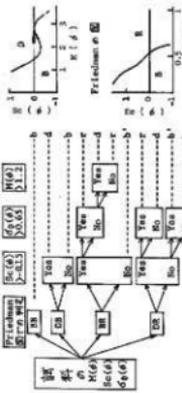


図 2 砂丘の堆積の過程の模式図

堆積物 DR, BB, DR, DR の 4 つである。埋没堆積のうち底層砂(砂床、埋没層)は DR と BB とになり、砂丘砂は DU およびその 3 つもある。埋没砂は BB と BB-DB の埋没となった。このように埋没の埋没層と B, D, R 堆積の組み合わせはさまざまあり対称がない。そこで、この他に M(砂)、s(砂)、M(s) の関係を用いて上記の堆積物よりよく適合するような堆積過程を作製した(図 2)。以下の堆積はこれによった。

砂丘の堆積過程の模式図

埋没層 DR, BB, DR, DR の 4 つは、b' と呼ばれた。これは埋没の山頂部であった。埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。

上層、下層(下層)埋没層 野外の堆積(埋没層など)から埋没物と推定したものおもひまはそれと異なるものと推定された。

埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。

埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。

埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。

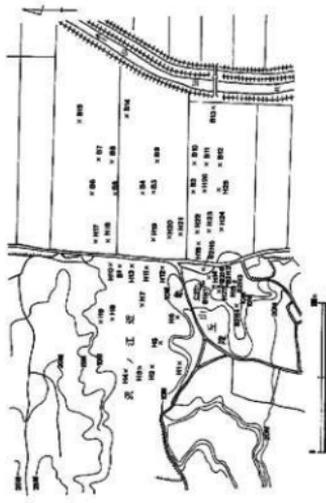


図 1 埋没層 DR, BB, DR の埋没層

考えられる。大塚式土層を出土した Va 層上部のシメント質砂の MC 年代は 4100 ± 120 年前 (Gak-10182)、火成 C2 土層を出土した IVa2 層下部の黒色粘土は 4320 ± 170 年前 (Gak-10181) と推定されたが、これらは考古学物から推定された年代よりもはるかに若い年代を示している。一方 IVa1 層の MC 年代は、900 ± 170 年前 (Gak-10180) であり、この層は埋没層よりも著しく新しい年代であった。この埋没層の埋没層を放す埋没層の埋没については、甲原はか (1983b) を参照されたい。

2. 砂丘の堆積過程

埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。

- (1) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。
- (2) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。
- (3) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。
- (4) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。
- (5) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。
- (6) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。
- (7) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。
- (8) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。
- (9) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。
- (10) 埋没層 DR, BB, DR の 4 つは、埋没物と考えられる。埋没 C2 Tr. V 層は埋没する。山頂部砂丘、埋没層の埋没物からの砂粒(埋没または水成またはもの)のはほとんどすべてが b' と呼ばれた。

図 2 砂丘の堆積の過程の模式図









## 亀ヶ岡遺跡関連文献一覧

- 弘前藩(山崎立朴写)(1623)『永祿日記』国書刊行会(1956年刊)
- 比良野貞彦(1796)「典民図彙」『日本農書全集』第1巻 農山漁村文化協会(1977年刊)
- 菅江真澄(1798a)「外浜奇勝(そとがはまきしょう)」『菅江真澄全集』第3巻 未来社(1972年刊)
- 菅江真澄(1798b)「追阿呂能通度(つがろのつと)」『菅江真澄全集』第3巻 未来社(1972年刊)
- 冢田 虎(1809)『随意録』『日本儒林叢書』1巻 東洋図書刊行会(1927年刊)
- 菅江真澄(1819)「新古祝典品類之図(しんこいわいべひんるいのかた)」『菅江真澄全集』第9巻 未来社(1973年刊)
- 関 思亮(1824)「津軽亀ヶ岡より掘り出す古磁器」『国立国会図書館蔵版 耽奇漫録』吉川弘文館(1993年刊)
- 藁 谷(1825)「奥州前岡山古陶器」『国立国会図書館蔵版 耽奇漫録』吉川弘文館(1993年刊)
- 平尾魯仙(1860)「谷の響」『青森県立図書館郷土双書』1 青森県立図書館
- 平尾魯仙(1885)「合浦奇談」『青森県立図書館郷土双書』1 青森県立図書館
- 白井光太郎(1886)「貝塚より出でし土偶の考」『人類学会報告』1巻2号 人類学会
- 神田孝平(1887a)「奥羽巡回報告」『東京人類学会報告』2巻11号 東京人類学会
- 神田孝平(1887b)「古土器図解(巻末石版図ヲ見ヨ)」『東京人類学会報告』2巻17号 東京人類学会
- 淡屋(神田孝平)(1887)「瓶ヶ岡土器図解(前号巻末ノ図ヲ見ヨ)」『東京人類学会雑誌』3巻22号 東京人類学会
- 佐藤 部(1887)「瓦偶人之図(第十九版)」『東京人類学会雑誌』3巻21号 東京人類学会
- 養虫山人(1887)「陸奥瓶岡ニテ未曾有ノ発見 津軽ノ養虫翁ノ手東」『東京人類学会報告』2巻16号 東京人類学会
- 淡屋(神田孝平)(1888a)「曲玉の有無如何」『東京人類学会雑誌』3巻26号 東京人類学会
- 淡屋(神田孝平)(1888b)「第二十八版図解」『東京人類学会雑誌』4巻42号 東京人類学会
- 若林勝邦(1889)「陸奥亀岡探求記」『東洋学芸雑誌』97号 東洋学芸社
- 佐藤 部(1890)「アイヌノ口碑ヲ駁シシセテ本邦石器時代ノ遺物遺跡ハアイヌノ物ナルヲ論ス」『東京人類学会雑誌』5巻47号 東京人類学会
- 坪井正五郎(1890)「ロンドン通信」『東京人類学会雑誌』5巻52号 東京人類学会
- 若林勝邦(1890)「貝塚土器図解」『東京人類学会雑誌』5巻54号 東京人類学会
- 坪井正五郎(1891)「ロンドン通信」『東京人類学会雑誌』6巻62号 東京人類学会
- 若林勝邦(1891)「貝塚土器二載テ」『東京人類学会雑誌』6巻61号 東京人類学会
- 若林勝邦(1892a)「磨り截りシ痕ヲ存スル石斧」『東京人類学会雑誌』7巻73号 東京人類学会
- 若林勝邦(1892b)「石器時代ノ鈎鈎」『東京人類学会雑誌』7巻77号 東京人類学会
- 若林勝邦(1892c)「六孔又ハ八孔ヲ有スル貝塚土器」『東京人類学会雑誌』7巻78号 東京人類学会
- 工藤祐龍(1894)「亀ヶ岡発見ノ奇形石器」『東京人類学会雑誌』9巻95号 東京人類学会
- 坪井正五郎(1894)「貝塚土器の面貌の奇異なる所以を説明す」『東洋学芸雑誌』11巻150号 東洋学芸社
- 坪井正五郎(1895a)「コロボックル風俗考 第一〜十回」『風俗画報』90・91・93・95・99・102・104・106・108
- 坪井正五郎(1895b)「北海道石器時代土器と本州石器時代土器との類似」『東京人類学会雑誌』11巻116号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1896a)「陸奥亀ヶ岡発掘報告」『東京人類学会雑誌』11巻118号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1896b)「陸奥国亀ヶ岡第二回発掘報告」『東京人類学会雑誌』11巻124号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1896c)「陸奥国亀ヶ岡第二回発掘報告(前号の続)」『東京人類学会雑誌』11巻125号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1896d)「盛岡中石器時代の遺物」『東京人類学会雑誌』12巻127号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1896e)「陸奥亀ヶ岡の地形地質及び発見物」『太陽』2巻16号
- 佐藤傳藏(1896f)「陸奥亀ヶ岡石器時代遺跡地勢地質及び発見品」『東京地学協会報告』18巻2号 東京地学協会
- 坪井正五郎(1896)「日本石器時代人民の口辺裝飾」『東洋学芸雑誌』13巻174号 東洋学芸社
- 若林勝邦(1896)「石器時代の土器中に入りしものは何か」『東京人類学会雑誌』12巻128号 東京人類学会
- 大野延太郎(1897)「土版土偶ノ関係」『東京人類学会雑誌』12巻131号 東京人類学会

- 工藤祐龍(1897)「亀ヶ岡発見の土偶及石鏃」『東京人類学会雑誌』12巻133号 東京人類学会
- 近藤城(1897)「瓶ヶ岡より近古掘出せし土器」『陸奥』
- 佐藤傳藏(1897a)「本邦石器時代の膠漆的遺物に就て」『東京人類学会雑誌』12巻138号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1897b)「共同備忘録」『東京人類学会雑誌』12巻138号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1897c)「共同備忘録」『東京人類学会雑誌』13巻140号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1898a)「本邦石器時代遺跡より発見せる土製の蓋及蓋らしきもの」『東京人類学会雑誌』13巻143号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1898b)「共同備忘録(第五回)」『東京人類学会雑誌』13巻143号 東京人類学会
- 坪井正五郎(1898)「日本に於ける石器時代遺物発見地の種類」『東洋学芸雑誌』15巻204号 東洋学芸社
- 沼田頼輔(1898)「把手の分類」『東京人類学会雑誌』13巻145号 東京人類学会
- 大野延太郎(1899)「石鏃=銃矢」『東京人類学会雑誌』14巻161号 東京人類学会
- 坪井正五郎(1899)「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』14巻161号 東京人類学会
- 大野雲外(1900)「石器時代土製仮面」『東京人類学会雑誌』16巻177号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1900a)「載籍上の亀ヶ岡」『東京人類学会雑誌』16巻176号 東京人類学会
- 佐藤傳藏(1900b)「亀ヶ岡より出る青玉の原石産地」『東京人類学会雑誌』16巻176号 東京人類学会
- 柴田常恵(1900)「日本石器時代の赤塗遺物」『東京人類学会雑誌』15巻172号 東京人類学会
- 板垣義彰・佐藤重敏(1901)「陸奥国西津軽郡に於ける土器、石器の発見地」『東京人類学会雑誌』17巻189号 東京人類学会
- 大野雲外(1901)『模様のくら 第1集 日本石器時代の部』 嵩山房
- 大野雲外・松村 瞭(1901)「陸奥地方旅行見聞録」『東京人類学会雑誌』17巻187号 東京人類学会
- 坪井正五郎(1901)「大腸骨形「繰り返し筋違」模様」『東京人類学会雑誌』16巻184号 東京人類学会
- 大野雲外(1902)「陸奥亀ヶ岡発見の土偶」『東京人類学会雑誌』18巻199号 東京人類学会
- 大野雲外・柴田常恵(1903)「図版考説」『東京人類学会雑誌』18巻207号 東京人類学会
- 大野雲外(1904)「磨面土偶に就て」『東京人類学会雑誌』20巻223号 東京人類学会
- 吉田文俊(1906a)「日本石器時代人民の頭髮」『東京人類学会雑誌』21巻238号 東京人類学会
- 吉田文俊(1906b)「日本石器時代人民の頭髮」『東京人類学会雑誌』21巻240号 東京人類学会
- 著者不明(1910)「石器時代土偶及び土版」『東京人類学会雑誌』25巻289号 東京人類学会
- 大野雲外(1918)「骨器の形式分類」『人類学会雑誌』33巻3号 東京人類学会
- 鳥居龍藏(1922)「日本石器時代民衆の女神信仰」『人類学会雑誌』37巻11号 東京人類学会
- 杉山寿栄男(1924)『原始文様集』 工芸美術研究会
- 杉山寿栄男(1928a)『日本原始工芸』 工芸美術研究会
- 杉山寿栄男(1928b)『日本原始工芸概説』 工芸美術研究会
- 中谷治宇二郎(1929a)「東北地方石器時代遺跡調査予報」『人類学雑誌』44巻3号 東京人類学会
- 中谷治宇二郎(1929b)『日本石器時代提要』 同書院
- 著者不明(1929)「雑報 亀ヶ岡発見遺物展覧会」『人類学雑誌』44巻7号 東京人類学会
- 杉山寿栄男(1931)『日本考古図録大成 第14輯 縄文土器』 日東書院
- 上田三平(1934)「陸前亀ヶ岡石器時代遺跡(口絵写真)」『考古学雑誌』24巻8号
- 喜田貞吉(1934)「奥羽地方石器時代末年代の下限—宋銭発掘の確実なる亀岡式土器遺跡調査報告—」『歴史地理』63巻1号
- 小岩井兼輝(1934)「亀ヶ岡新石器時代遺跡と過去水準の変化に就て」『日本学術協会報告』9巻2号
- 甲野 勇(1935)「植物性遺物を出す遺跡」『ドルメン 特輯日本石器時代』6月特増大号 同書院
- 中谷治宇二郎(1935)『日本先史学序史』 岩波書店
- 山内清男(1936)「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』1巻4号 翰林書房
- 直良信夫・江坂輝彌(1941)「亀ヶ岡泥炭層遺跡出土遺物に就いて」『古代文化』12巻3号
- 中谷治宇二郎(1943)『校訂 日本石器時代提要』(梅原末治校) 甲島書林
- 甲野 勇(1953)『縄文土器のはなし』 世界社
- 清野謙次(1954)『日本考古学・人類学史上巻』 岩波書店

- 佐藤公知(1954)「亀ヶ岡について」『西津軽郡史』 西津軽郡史編集委員会
- 清水潤三(1955)「青森県西津軽郡亀ヶ岡遺跡」『日本考古学年報』3 日本考古学協会
- 成田彦栄(1955)「永祿日記雑考(上)」『東奥文化』2号 青森県文化財保護協会
- 佐藤公知(1956)『亀ヶ岡文化』 亀ヶ岡遺跡顕彰保存会
- 成田彦栄(1956a)「永祿日記雑考(中)」『東奥文化』3号 青森県文化財保護協会
- 成田彦栄(1956b)「永祿日記雑考(下)」『東奥文化』4号 青森県文化財保護協会
- 永峯光一(1959)「書評 亀ヶ岡遺跡」『考古学雑誌』45巻3号
- 堀 正一(1959)「青森県亀ヶ岡遺跡の花粉分析」『亀ヶ岡遺跡—青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究—』
- 三田史学会(1959)『亀ヶ岡遺跡—青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究—』
- 芥沢長介(1960)『石器時代の日本』 築地書館
- 京都大学文学部(1960)『京都大学文学部博物館考古学資料目録』
- 井上郷太郎(1962)『考古学資料図録 井上コレクション』多摩考古学研究会
- 山内清男(1964)『日本原始美術1 縄文式土器』 講談社
- 甲野 勇(1964)『日本原始美術2 土偶・装身具』 講談社
- 大高 興(1969)『風韻堂収蔵庫 縄文文化遺物集成』 ヨシダ印刷
- サントリー美術館(1969)『土偶と土器』
- 村越 潔(1970)「紹介 永祿日記」『月刊考古学ジャーナル』43 ニュー・サイエンス社
- 小林達雄(1972)「亀ヶ岡遺跡」『新版考古学講座』11 雄山閣
- 青森県立郷土館(1973)『風韻堂コレクション目録』
- 清水潤三(1973)「亀ヶ岡遺跡」『日本古代遺跡便覧』 社会思想社
- 藤村東男(1973)「青森県亀ヶ岡遺跡出土の漆塗土器について」『史学』45巻3号 三田史学会
- 大高興(1974)「亀ヶ岡遺跡出土の土器及び遺跡周辺粘土の理学的研究」『北奥古代文化』6号 北奥古代文化研究会
- 佐原 薫(1974)『日本の原始美術2 縄文土器II』 講談社
- 江坂輝彌・野口義藏編(1974)『古代史発掘3 土偶芸術と信仰』 講談社
- 村越潔ほか(1974)『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第14集 青森県教育委員会
- 新渡戸 隆(1974)「第4節 花粉分析について」『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第14集 青森県教育委員会
- 鈴木克彦(1975)「亀ヶ岡遺跡」『日本考古学年報』26 日本考古学協会
- 須藤 隆(1976)「亀ヶ岡式土器の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』23巻2号 考古学研究会
- 磯崎正彦(1977)「亀ヶ岡式土器研究小史—亀ヶ岡式土器の基礎的研究(1)—」『大阪学院大学人文自然論叢』 大阪学院大学人文自然学会
- 鈴木克彦(1977)「廃棄論の再構成と課題—亀ヶ岡パターン認識から—」『月刊考古学ジャーナル』142 ニュー・サイエンス社
- 鈴木克彦(1978)「県重宝指定の亀ヶ岡遺跡出土遺物」について『青森県立郷土館調査研究年報』4 青森県立郷土館
- 斎藤 志編著(1979)『日本考古学史資料集成3 明治時代2』 吉川弘文館
- 藤村東男(1979)「青森県亀ヶ岡遺跡出土の壺形土器の補修について」『樹木』14 慶応義塾女子高等学校
- 鈴木克彦(1980)「岩版・土版の研究序説」『青森県立郷土館調査研究年報』5 青森県立郷土館
- 市原壽文ほか(1980)「縄文後期・晩期の低湿地遺跡と環壕復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究』 文部省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」
- 上野 武(1980)「放浪の絵師 養虫山人」『考古学の先覚者たち』 中央公論社
- 角田芳昭(1980)「資料紹介 神田亀ヶ岡出土『土偶』」『『評』関西大学考古学等資料室彙報No.1(創刊号) 関西大学考古学等資料室
- 那須孝徳・山内 文(1980)「縄文後期・晩期低湿地遺跡における古植生の復元」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究』 文部省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」

- 福田友之(1980)「亀ヶ岡文化研究略史—土器の発見から第二次大戦前の山内清男による土器編年確立まで—」『考古風土記』5号
- 青森県立郷土館考古部門(1981)「亀ヶ岡遺跡の調査(1)」『青森県立郷土館調査研究年報』6 青森県立郷土館
- 市原壽文ほか(1981)「縄文後・晩期における低湿性遺跡の研究」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 昭和55年度年次報告書』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 鈴木克彦編(1981)『青森県の遺跡めぐり』亀ヶ岡文化研究会
- 鈴木公雄・林 謙作編(1981)『縄文土器大成4 晩期』講談社
- 青森県立郷土館考古部門(1982)「亀ヶ岡遺跡の調査(2)」『青森県立郷土館調査研究年報』7 青森県立郷土館
- 鈴木克彦(1982)「風韻堂コレクション: 岩偶、亀型土製品、土器片利用の円板」『青森県立郷土館調査研究年報』7 青森県立郷土館
- 東北大学文学部(1982)『東北大学文学部考古学資料図録』1・2
- 市原壽文ほか(1983)「津軽七里長浜の縄文時代遺物包含層について」『考古学研究』29 巻4号 考古学研究会
- 上野 武(1983)「亀ヶ岡遺跡」『日本の遺跡発掘物語 第2巻 縄文時代』社会思想社
- 金子淳昌・鈴木克彦(1983)「風韻堂コレクションの骨角器及び自然遺物」『青森県立郷土館調査研究年報』8 青森県立郷土館
- 國學院大學考古学資料館研究室(1983)『國學院大學考古学資料館要覧 故野口義隆氏寄贈資料』
- 市立函館博物館(1983)『児玉コレクション目録1』
- 那須孝徳・市原壽文(1983)「低湿性遺跡 および関連する用語の定義について」『考古学研究』30 巻2号 考古学研究会
- 村越 潔(1983)『亀ヶ岡式土器』考古学ライブラリー18 ニュー・サイエンス社
- 市川金丸・鈴木克彦(1984)「亀ヶ岡石器時代遺跡」青森県立郷土館調査報告第17集・考古-6 青森県立郷土館
- 市原壽文ほか(1984)「縄文後・晩期における低湿性遺跡の特殊性に関する研究」『古文化財の自然科学的研究』同朋舎出版
- 日浦 勇ほか(1984)「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究」『古文化財の自然科学的研究』同朋舎出版
- 村越 潔(1984)『亀ヶ岡式遺跡』考古学ライブラリー19 ニュー・サイエンス社
- 山野井 徹・佐藤牧子(1984)「1. 亀ヶ岡遺跡の花粉分析—沢根B-2区を中心として—」『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告第17集・考古-6 青森県立郷土館
- 麻生 優(1985)「層位論」『岩波講座日本考古学1 研究の方法』岩波書店
- 鈴木克彦(1985)「4 青森県 亀ヶ岡遺跡」『探訪 縄文の遺跡 東日本編』有斐閣
- 鈴木克彦・川口 潤(1985)「亀ヶ岡遺跡沢根D区出土の遺物」『青森県立郷土館調査研究年報』10 青森県立郷土館
- 鈴木克彦(1986)『日本の古代遺跡29 青森』保育社
- 村越 潔(1987)「亀ヶ岡遺跡の成因」『論争・学説 日本の考古学 第3巻 縄文時代II』雄山閣
- 藤沼邦彦(1989)「亀ヶ岡式土器の文様の描き方—雲形文を中心として—」『考古学論叢II』東出版事案社
- 青森県埋蔵文化財調査センター編(1990a)『図説 ふるさと青森の歴史 台地から甕った祖先の足跡 総括編』青森県文化財保護協会
- 青森県埋蔵文化財調査センター編(1990b)『図説 ふるさと青森の歴史シリーズ3 北の誇り・亀ヶ岡文化 縄文時代晩期編』青森県文化財保護協会
- 立正大学文学部考古学研究室(1990)『吉田格コレクション 考古資料図録』
- 明治大学考古学博物館(1991)『明治大学考古学陳列館目録』
- 青森県立郷土館(1996)『縄文の玉手箱 一風韻堂コレクション目録—』
- 磯前順一・赤澤 威(1996)『東京大学総合研究博物館所蔵 縄文時代土偶・その他土製品カタログ(増訂版)』言叢社
- 東京国立博物館(1996)『東京国立博物館図版目録 縄文遺物篇(土偶・土製品)』中央公論美術出版
- 小笠原正明ほか(1997)「亀ヶ岡遺跡出土のガラス玉の成分分析」『青森県考古学』10号 青森県考古学会
- 藤沼邦彦(1997)『歴史発掘③ 縄文の土偶』講談社
- 関西大学博物館編(1998)『博物館資料図録』
- 須藤 隆(1998)『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究—縄文から弥生へ—』纂修堂

- 中村 大 (1998) 「亀ヶ岡文化における葬制の基礎的研究 (1) —東北北部の土壌墓について—」『國學院大學考古学資料館紀要』14 輯
- 三井聖史 (1999a~d) 「『永祿日記』異本の問題 元和九年条をめぐって—①—④」『縄文ファイル』No.43・44・46・47
- 江坂輝彌 (2000) 「コラム 戦前 1935 年頃 亀ヶ岡遺跡見学の思い出」『青森県史研究』5 号 青森県環境生活部県史編さん室
- 青森県立郷土館 (2001) 『青森県立郷土館収蔵資料図録 第 3 集・考古編 (2)』
- 日本考古学協会 2001 年度盛岡大会実行委員会 (2001) 『亀ヶ岡文化—集落とその実態—晩期遺構集 I』
- 鈴木克彦 (2002) 「風韻堂コレクションの縄文土器 (1)」 青森県立郷土館調査研究年報 26
- 辰馬考古資料館 (2002) 『平成 14 年度秋季展 縄文遺跡探訪—亀ヶ岡遺跡とその周辺—』
- 東京国立博物館 (2003) 『東京国立博物館図版目録 縄文遺物篇 (骨角器)』中央公論美術出版
- 関根達人 (2004) 「本州出土の突突文・刺突文系土器群とその意味」『人文社会論叢 (人文科学篇)』 弘前大学人文学部
- 八王子市郷土資料館 (2005) 『井上コレクション よみがえる縄文の技と美』
- 青森県立埋蔵文化財調査センター (2006) 「青森県における装身具の集成 縄文時代編」『研究紀要』11 号
- 川村眞一 (2006) 「つがる市の遺跡を紹介した地質学者・佐藤傳蔵」『郷土文化誌 いしがみ』『いしがみ』刊行会
- 佐野忠史 (2006a) 「つがる市亀ヶ岡遺跡」『研究発表会資料集 亀ヶ岡文化の諸問題』 青森県考古学会・弘前大学人文学部日本考古学研究室
- 佐野忠史 (2006b) 「世界に誇るつがるの KMEGAOKA 亀ヶ岡遺跡」『図説 五所川原・西北津軽の歴史』 郷土出版社
- 関根達人 (2006) 「菅江真澄が描いた『縄文土器』と『土偶』」『真澄学』3 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 藤沼邦彦ほか (2006a) 『ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」図録』 弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 3 弘前大学人文学部日本考古学研究室
- 藤沼邦彦ほか (2006b) 「つがる市亀ヶ岡遺跡の縄文晩期の土器について」『亀ヶ岡文化遺物実測図集 (2)』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 4 弘前大学人文学部日本考古学研究室
- 須藤 隆福 (2007) 『東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性』平成 17~18 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (1) 研究成果報告書
- 村越 潔 (2007) 『青森県の考古学史—先覚者の足跡を尋ねて—』 弘前大学教育学部考古学研究 08 会
- 関根達人 (2007) 「描かれた亀ヶ岡文化」『津軽学』第 2 号 東北芸術工科大学
- 青森県立郷土館 (2008) 『蓑山山人と青森 放浪の画家が描いた明治の青森』
- 鈴木克彦 (2008) 「十腰内 1 遺跡の青玉攻玉と壺に収納された青玉の流通」『研究紀要』13 青森県埋蔵文化財調査センター
- 福田友之 (2008) 「亀ヶ岡遺跡関係文献目録」『私の考古学ノート —北の大地と遺跡と海にひかれて—』 弘前大学教育学部考古学研究室 08 会
- 赤坂明美ほか (2008) 「亀ヶ岡文化の土偶 (附、仮面) の紹介」『亀ヶ岡文化雑考集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 7 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- 藤沼邦彦 (2008) 「江戸時代の文献に見る亀ヶ岡遺跡」『亀ヶ岡文化雑考集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 7 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- 藤沼邦彦ほか (2008a) 「亀ヶ岡文化における彩文土器」『亀ヶ岡文化雑考集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 7 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- 藤沼邦彦ほか (2008b) 「蓑山山人の「陸奥全国神代石古陶之図」と青森新聞の「第二回弘前博覧会観覧の記」について」『亀ヶ岡文化雑考集』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 7 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- 藤沼邦彦・関根達人 (2008) 「亀ヶ岡式土器 (亀ヶ岡式系土器群)」『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロダクション
- 関根達人編 (2009) 『佐藤部 考古画譜 I』 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- つがる市教育委員会ほか (2009) 『史跡亀ヶ岡石器時代遺跡・田小屋野貝塚保存管理計画書』
- 文化庁・東京国立博物館ほか (2009) 『文化庁海外展 大英博物館福国記念 国宝 土偶展』NHK ほか
- 鈴木克彦 (2010) 「III 東北地方北部の縄文集落の葬制」『シリーズ 縄文集落の多様性 II 葬制』 雄山閣
- 関根達人ほか (2010) 『成田彦栄氏考古・アイヌ民族資料図録』弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- 関根達人編 (2010) 『佐藤部 考古画譜 II』 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター

- つがる市教育委員会 (2010) 『田小屋野貝塚2・亀ヶ岡遺跡4・上沢辺 (2) 遺跡』 つがる市遺跡調査報告書5
- 原田昌幸 (2010) 『日本の美術 土偶とその周辺 (縄文後期～晩期)』No.527 ぎょうせい
- 上條信彦編 (2011) 『佐藤部 考古画譜Ⅲ』弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- 明治大学古文化財研究所 (2011) 『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定—基礎データ集 (2) —』
- 青森県立郷土館 (2012) 『奇蹟記念 成田彦栄コレクション選』
- 千葉市立郷土博物館 (2012) 『平成24年度特別展 漆—その歴史と文化—』
- つがる市教育委員会 (2012) 『豊富遺跡2・亀ヶ岡遺跡5・筒木坂屏風山遺跡2・田小屋野貝塚3・下相野遺跡』 つがる市遺跡調査報告書7
- 鈴木希帆 (2013) 「ギメ東洋美術館所蔵の縄文土器—ファミリー神父蒐集品の調査報告を兼ねて—」『武蔵野美術大学研究紀要』No.44 武蔵野美術大学
- 青森県史編さん考古部会 (2013) 『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』 青森県
- 小久保拓也 (2013) 「植物性遺物」『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』 青森県
- 杉山陽亮 (2013) 「骨角器」『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』 青森県
- 鈴木克彦 (2013) 「国史跡 亀ヶ岡遺跡 (209002)」『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』 青森県
- 関根進人 (2013) 「土器の編年」『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』 青森県
- 福田友之 (2013) 「装身具」『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』 青森県
- 藤沼邦彦 (2013) 「江戸時代の亀ヶ岡遺跡研究史」『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』 青森県
- 上條信彦編 (2014) 『亀ヶ岡文化の低湿地遺跡』 冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト調査成果報告書1 弘前大学人文学部北日本考古学研究中心・弘前大学人文学部日本考古学研究室
- 成田滋彦 (2014) 「土器を持つ土偶—青森県亀ヶ岡遺跡—」『青森県考古学』22 青森県考古学会
- 福田友之 (2014) 「亀ヶ岡発掘をめぐる人びと—東京人類学会との関わりを中心に—」『青森県考古学』22 青森県考古学会
- 片岡太郎・上條信彦ほか編 (2015) 『亀ヶ岡文化の漆工芸Ⅱ 北日本における先史資源利用の研究』 冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト調査成果報告書5 弘前大学人文学部北日本考古学研究中心
- 国立歴史民俗博物館 (2015) 『亀ヶ岡遺跡・是川遺跡縄文時代遺物』 国立歴史民俗博物館資料図録11
- 鈴木克彦 (2015) 『遮光器土偶の集成研究』 弘前学院出版会
- 田中克典ほか編 (2015) 『日本の古代米Ⅱ 佐藤敏也コレクションの研究』 冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト調査成果報告書4 弘前大学人文学部北日本考古学研究中心
- 福田友之・福井敏隆 (2015) 「弘前市立弘前図書館所蔵の神田孝平から下澤保則にあてた書簡—陸奥考古学界草創期の一断面—」『弘前大学国史研究』139号
- 辻誠一郎・佐野忠史 (2015) 『つがる市合併10周年記念冊子 つがる市の環境変遷と縄文遺跡』 つがる市教育委員会
- 日本考古学協会 2016年度弘前大会実行委員会 (2016) 『第1分科会 津軽海峡圏の縄文文化 研究報告資料集』
- 岩手県立博物館 (2017) 『第68回企画展 遮光器土偶の世界』 (公財) 岩手県文化振興事業団
- 村車まどかほか (2017) 『亀ヶ岡遺跡出土ガラス玉の考古科学的分析とその意義』『研究紀要』22号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 東京国立博物館ほか (2018) 『特別展 縄文—1万年の美の鼓動』 NHKほか
- 中村 大 (2018) 「北日本の縄文晩期における墓制の地域性とその解釈」『一般社団法人日本考古学協会第84回総会 研究発表要旨』一般社団法人日本考古学協会
- 福田友之 (2018) 「青森県の考古学が始まったとき—神田孝平、明治19年夏羽田巡回旅行—」『青森県考古学』26 青森県考古学会

國學院大學「柴田常恵写真資料 國學院大學デジタル・ミュージアム」

[[http://k-arc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbTop.do?class\\_name=co\\_lfsj](http://k-arc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbTop.do?class_name=co_lfsj)] (最終閲覧日: 2019年5月14日)

## 引用・参考文献

※ 亀ヶ岡遺跡に関連する文献は巻末資料参照

- 青森県 (2009) 『青森県遺跡地図』
- 青森県教育委員会 (1976) 『白山堂遺跡・妻の神遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 30 集
- 青森県教育委員会 (1977) 『石上神社遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 35 集
- 青森県教育委員会 (1978) 『源常平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 39 集
- 青森県教育委員会 (1980) 『神明町遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 58 集
- 青森県教育委員会 (1984) 『朝日山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 87 集
- 青森県教育委員会 (1988) 『上尾敷 (1) 遺跡 C 地区』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 113 集
- 青森県教育委員会 (2002) 『清水遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 331 集
- 青森県史編さん自然部会 (2001) 『青森県史 自然編 地学』 青森県
- 青森県史編さん考古部会 (2005) 『青森県史 資料編 考古 3 弥生～古代』 青森県
- 青森県史編さん考古部会 (2017) 『青森県史 資料編 考古 1 旧石器・縄文草創期～中期』 青森県
- 青森県埋蔵文化財調査センター (1993) 『朝日山遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 152 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (1994) 『朝日山遺跡Ⅲ (第一分冊)』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 156 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (1995a) 『千苜 (1) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 174 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (1995b) 『泉山遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 181 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (1996) 『泉山遺跡Ⅲ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 190 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (1999a) 『隠川 (11) 遺跡Ⅰ・隠川 (12) 遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 260 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (1999b) 『十腰内 (1) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 261 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2001) 『十腰内 (1) 遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 304 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2002) 『朝日山 (2) 遺跡Ⅴ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 325 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2003) 『朝日山 (2) 遺跡Ⅵ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 350 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2004) 『朝日山 (2) 遺跡Ⅶ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 369 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2016a) 『川原平 (1) 遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 564 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2016b) 『川原平 (1) 遺跡Ⅲ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 565 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2016c) 『川原平 (4) 遺跡Ⅳ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 566 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2017a) 『川原平 (1) 遺跡Ⅳ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 576 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2017b) 『川原平 (1) 遺跡Ⅴ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 577 集
- 青森県埋蔵文化財調査センター (2017c) 『川原平 (1) 遺跡Ⅶ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 580 集
- 青森県立郷土館 (1995) 『木造町田小屋野貝塚 一岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書一』 青森県立郷土館調査報告書第 35 集 考古-10
- 青森県立郷土館 (2000) 『東北町長者久保遺跡・木造町丸山遺跡』 青森県立郷土館調査報告書第 44 集
- 青森市教育委員会 (1985) 『長森遺跡発掘調査報告書』 青森市の埋蔵文化財 12
- 阿部美徳・神田和彦 (2015) 『秋田市地方遺跡における土壌裏の分析—縄文時代晩期における社会構造研究のための基礎的操作—』 『秋田考古学』 第 59 号 秋田考古学協会
- 秋田県考古学協会 (1979) 『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』
- 秋田県教育委員会 (1978) 『湯出野遺跡発掘調査概報』 秋田県文化財調査報告書第 53 集
- 秋田県教育委員会 (1981) 『藤株遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第 8 集
- 秋田県埋蔵文化財センター (1983) 『平鹿遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第 101 集
- 秋田県埋蔵文化財センター (1992) 『曲田地区農免道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—家ノ後遺跡—』 秋田県文化財調査報告書第 229 集
- 秋田県埋蔵文化財センター (1994) 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅤⅧ—虫ノ内Ⅲ遺跡—』 秋田県文化財調査報告書

第242集

秋田県埋蔵文化財センター (1998) 『虫内1遺跡—東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XⅢ—』秋田県文化財調査報告書第274集

秋田県埋蔵文化財センター (2000) 『戸平川遺跡—東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅣ—』秋田県文化財調査報告書第294集

秋田県埋蔵文化財センター (2003) 『向塚田 A 遺跡—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ— 遺構篇』秋田県文化財調査報告書第346集

秋田県埋蔵文化財センター (2004) 『向塚田 A 遺跡—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ— 遺構篇』秋田県文化財調査報告書第370集

秋田市 (2002) 『秋田市史 第六巻 考古 資料編』

秋田市産業部・秋田市教育委員会 (1980) 『秋田市上新城中学校遺跡 林道工事・小グラウンド造成に伴う緊急発掘調査報告書』

秋田市教育委員会 (1985) 『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下場 E 遺跡ほか』

秋田市教育委員会 (1987) 『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 地方遺跡 台 B 遺跡』

秋田市教育委員会 (1989) 『秋田市上新城中学校遺跡—学校改築に伴う緊急発掘調査概要—』

秋田市教育委員会 (1991) 『秋田市上新城中学校遺跡—学校改築に伴う緊急発掘調査概要—』

秋田市教育委員会 (1992) 『秋田市上新城中学校遺跡—学校改築に伴う緊急発掘調査報告書—』

阿部芳郎 (2004) 『失われた史前学 公爵大山柏と日本考古学』 岩波書店

板柳町教育委員会 (1993) 『土井1号遺跡』

岩木山刊行会 (1968) 『岩木山』 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書

(財)岩手県埋蔵文化財センター (1985) 『曲田1遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第87集

上田三平 (1935) 『史蹟として指定された石器時代遺跡』 『ドルメン 特輯 日本石器時代』 6月特輯増大号 図書院

江上波夫ほか (1936) 『日本石器時代文化の源流と下限を語る一座談会』 『ミネルヴァ』 1巻1号 翰林書房

江坂輝彌 (1970) 『石神遺跡』 ニュー・サイエンス社

大里雄吉 (1927) 『陸奥國は川村中居石器時代遺跡発見の植物質遺物に就いて』 『歴史地理』 49巻6号 日本歴史地理学会

大谷敏三 (2010) 『シリーズ「遺跡を学ぶ」074 北の縄文人の祭儀場 キウス周墳墓群』 新泉社

小山内壽一・岡田康博 (1983) 「木造町神田遺跡出土の後北式土器について」 『弘前大学考古学研究』 第2号 弘前大学考古学研究会

尾谷雅比古 (2018) 「文化財保護行政の歴史と課題—南朝関係史蹟の指定経過から—」 『日本史研究』 673

金木町教育委員会 (1977) 『妻の神遺跡発掘調査報告書』

上條信彦編 (2019) 『岩木山麓における弥生時代前半期の研究 砂沢・廻堰大溜池(1)・清水森西遺跡発掘調査および津軽平野弥生前半期遺跡の土器圧痕調査報告』 弘前大学人文社会学部 北日本考古学研究中心

木古内町教育委員会 (2003) 『大釜谷3遺跡—南渡島地区広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査報告書IX—』

喜田貞吉 (1933) 『遷厝記念 六十年之回顧』

喜田貞吉 (1934) 「あばたも「えくぼ」「えくぼ」も「あばた」—日本石器時代(終末期問題)』 『ミネルヴァ』 1巻5号 翰林書房

喜田貞吉・杉山寿栄男 (1932) 『日本石器時代植物性遺物図録』 刀江書院

木造町総務課編 (1976) 『1976年 きづくり』 木造町

木村鐵次郎 (1989) 『西津軽郡鮎ヶ沢町大曲遺跡発掘調査報告』 『青森県立郷土館調査研究年報』 第13号 青森県立郷土館

甲野 勇 (1930) 「青森県三戸郡は川村中居石器時代遺跡調査概報」 『史前学雑誌』 2巻4号 史前学会

肥塚隆保ほか (2010) 「材質とその歴史的変遷」 『月刊文化財』 566

五所川原市教育委員会 (1975~1992) 『観音林遺跡(第1~10次)』 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第3・7~15集

五所川原市教育委員会 (2006) 『五月女遺跡』 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第27集

五所川原市教育委員会 (2017) 『五月女遺跡』 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第34集

小泊村教育委員会・早稲田大学文学部考古学研究室 (1991) 『魂文沼遺跡発掘調査報告書』 小泊村文化財調査報告2

板井清彦 (1954) 「青森県十三村中島発見の土師器」 『考古学研究』 第40巻第1号

- 坂井清彦ほか(1985)「青森市玉清水遺跡発掘調査概報」『月刊考古学ジャーナル』252 ニュー・サイエンス社
- 佐藤公知(1954)『西津軽郡史』西津軽郡史編集委員会
- 佐藤博藏(1894)「常陸国福田村貝塚探求報告」『東京人類学会雑誌』9巻100号 東京人類学会
- 佐藤博藏(1898)「陸奥国床舞村発見の土偶に就て」『東京人類学会雑誌』13巻142号 東京人類学会
- 佐藤博藏・若林勝邦(1894)「常陸国浮島村貝塚探求報告」『東京人類学会雑誌』10巻105号 東京人類学会
- 市浦村教育委員会(1983)『市浦村五女菴遺跡』
- 静岡市立登呂博物館(2012)『登呂博物館開館40周年記念展 登呂遺跡はじめて物語～40メモリーズ～』
- 下村三四吉・八木荘三郎(1894)「下総国香取郡阿玉貝塚探求報告」『東京人類学会雑誌』9巻97号 東京人類学会
- 車力村教育委員会(1990～1995)『牛潟(1)遺跡発掘調査概報I～IV』車力村文化財調査報告書第1～4集
- 車力村教育委員会(2004)『牛潟(2)遺跡試掘調査報告書』車力村文化財調査報告書第7集
- 車力村教育委員会(2005)『牛潟(2)遺跡』車力村文化財調査報告書第8集
- 浄法寺町教育委員会(2001)『上杉遺跡』
- 鈴木希帆(2015)「スウェーデン皇太子に贈られた縄文土器—紀州徳川コレクションの調査を兼ねて—」『武蔵野美術大学研究紀要』No.45 武蔵野美術大学
- 滝沢村教育委員会ほか(1986)『湯舟沢遺跡』滝沢村教育委員会文化財調査報告書第2集
- つがる市教育委員会(2008a)『石神遺跡6』つがる市遺跡調査報告書第1集
- つがる市教育委員会(2008b)『筒木坂屏風山遺跡』つがる市遺跡調査報告書第2集
- つがる市教育委員会(2009)『牛潟(2)遺跡3』つがる市遺跡調査報告書第3集
- つがる市教育委員会(2010)『牛潟(1)遺跡5』つがる市遺跡調査報告書第4集
- つがる市教育委員会(2015)『石神遺跡8』つがる市遺跡調査報告書第8集
- つがる市教育委員会(2016)『田小屋野貝塚総括報告書』つがる市遺跡調査報告書第9集
- 辻 誠一郎(2001)「木造町西海岸、出来島の泥炭層と埋没林」『生態系のタイムカプセル ～青森県埋没林調査報告書～』青森県教育委員会
- 坪井清足(1962)『縄文文化論』『岩波講座 日本歴史』1 岩波書店
- 坪井正五郎(1893)「西ヶ原貝塚探求報告 其一～其七」『東京人類学会雑誌』8巻85・89号、9巻91・93号 東京人類学会
- 東奥日報社(1969)『青森県人名大辞典』
- 藤間生大(1951)『日本民族の形成』 岩波書店
- 鳥居龍藏(1918)『有史以前の日本』 磯部甲陽堂
- 十和田市教育委員会(1984)『明戸遺跡発掘調査報告書』十和田市埋蔵文化財発掘調査3
- 中島友之(2005)「青森市朝日山(2)遺跡の土坑墓について」『研究紀要』第10号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 中村五郎編(1996)「第2章 山内清男先生伝記資料」『画竜点睛』山内先生没後25年記念論集刊行会
- 浪岡町教育委員会(2002)『平成13年度 浪岡町文化財紀要II』
- 成田幸男(1986)『自分史 津軽筆筆の狭間に生きて』
- 西農村整備事業編(1996)『西津軽の土地改良(大規模ほ場整備事業の実績)』
- 西村正衛ほか(1952)「青森縣森田村附近の遺跡調査概報」『古代』第5号 早稲田大学考古学会
- 長谷部言人(1919)「宮戸島里濱貝塚の土器に就いて」『現代之科学』7巻3号
- 長谷部言人(1925)「陸前大淵貝塚発掘調査所見」『人類学雑誌』40巻10号 東京人類学会
- 長谷部言人(1927)「石器時代の死産児埋葬」『人類学雑誌』42巻8号 東京人類学会
- 八戸市教育委員会(1988)『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書26
- 八戸市教育委員会(2005)『足ノ川中居遺跡5』八戸市埋蔵文化財調査報告書111
- 八戸市教育委員会(2012)『史跡は川石器時代遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書135
- 八戸市南郷区役所建設課(2007)『荒谷遺跡』八戸市南郷区埋蔵文化財調査報告書
- 弘前市教育委員会(1988)『砂沢遺跡発掘調査報告書(図版編)』
- 弘前市教育委員会(1991)『砂沢遺跡発掘調査報告書(本文編)』
- 弘前大学教育学部考古学研究室(1981)「牧野II遺跡出土遺物について(1)—岩木山麓の縄文時代終末期の土器資料—」弘

前大学考古学研究会 創刊号 弘前大学考古学研究会

福島正夫 (1962) 『地租改正の研究』 有斐閣

藤沼邦彦・関根達人ほか (2005) 『青森県東津軽郡平館村今津遺跡発掘調査報告書—津軽半島東沿岸部における亀ヶ岡文化の遺跡—』 弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告2 弘前大学人文学部日本考古学研究室

文化財保護委員会編 (1960) 『文化財保護の歩み』

文化庁 (2001) 『文化財保護法五十年史』 株式会社ぎょうせい

北海道開拓記念館 (1976) 『札幌—北海道上磯郡木古内町における縄文時代晩期土壌墓の調査—』 北海道博物館協会

三瓶村教育委員会 (1996) 『宇鉄遺跡発掘調査報告書』 宇鉄遺跡発掘調査会

森田村教育委員会 (2001) 『八重菊 (1) 遺跡』 森田村緊急発掘調査報告書第7集

森田村教育委員会 (2002) 『八重菊 (1) 遺跡II』 森田村緊急発掘調査報告書第8集

森田村教育委員会 (2003) 『八重菊 (1) 遺跡III・鶴喰 (6) 遺跡・鶴喰 (9) 遺跡』 森田村緊急発掘調査報告書第9集

森田村教育委員会 (2004) 『真鶴遺跡・豊原 (1) 遺跡』 森田村緊急発掘調査報告書第10集

森山泰太郎 (1977) 「奥民図彙・解題」 『日本農書全集』 第1巻 社団法人農山漁村文化協会

山口 巖 (2001) 「上杉沢遺跡の縄文晩期集落の変遷」 『亀ヶ岡文化—集落とその実態—晩期遺構集成I』 日本考古学協会  
2001年度盛岡大会実行委員会

山内清男 (1929) 「関東北に於ける繊維土器」 『史前学雑誌』 1巻2号 史前学会

山内清男 (1930) 「所謂亀ヶ岡式の分布と縄文式土器の終末」 『考古学』 1巻3号 東京考古学会

山内清男 (1932) 「日本遠古之文化 四 縄文土器の終末二」 『ドルメン』 1巻7号 同書院

山内清男 (1936) 「考古学の正道—喜田博士に答ふ」 『ミネルヴァ』 1巻6号 翰林書房

山内清男 (1937) 「縄文土器型式の細別と大別」 『先史考古学』 1巻1号 先史考古学会

八木庄三郎・下村三四吉 (1893) 「常陸椎塚介塚発掘報告」 『東京人類学会雑誌』 8巻87号 東京人類学会

八幡一郎 (1936) 「飛騨の亀ヶ岡式土器」 『ひだびと』 4巻4号 飛騨考古土俗学会